

F13-U32-3㊦



1200500764022

F13  
U32  
3



始





F13  
U32  
3

歲月

上田廣著

文藝春秋社刊





925  
49

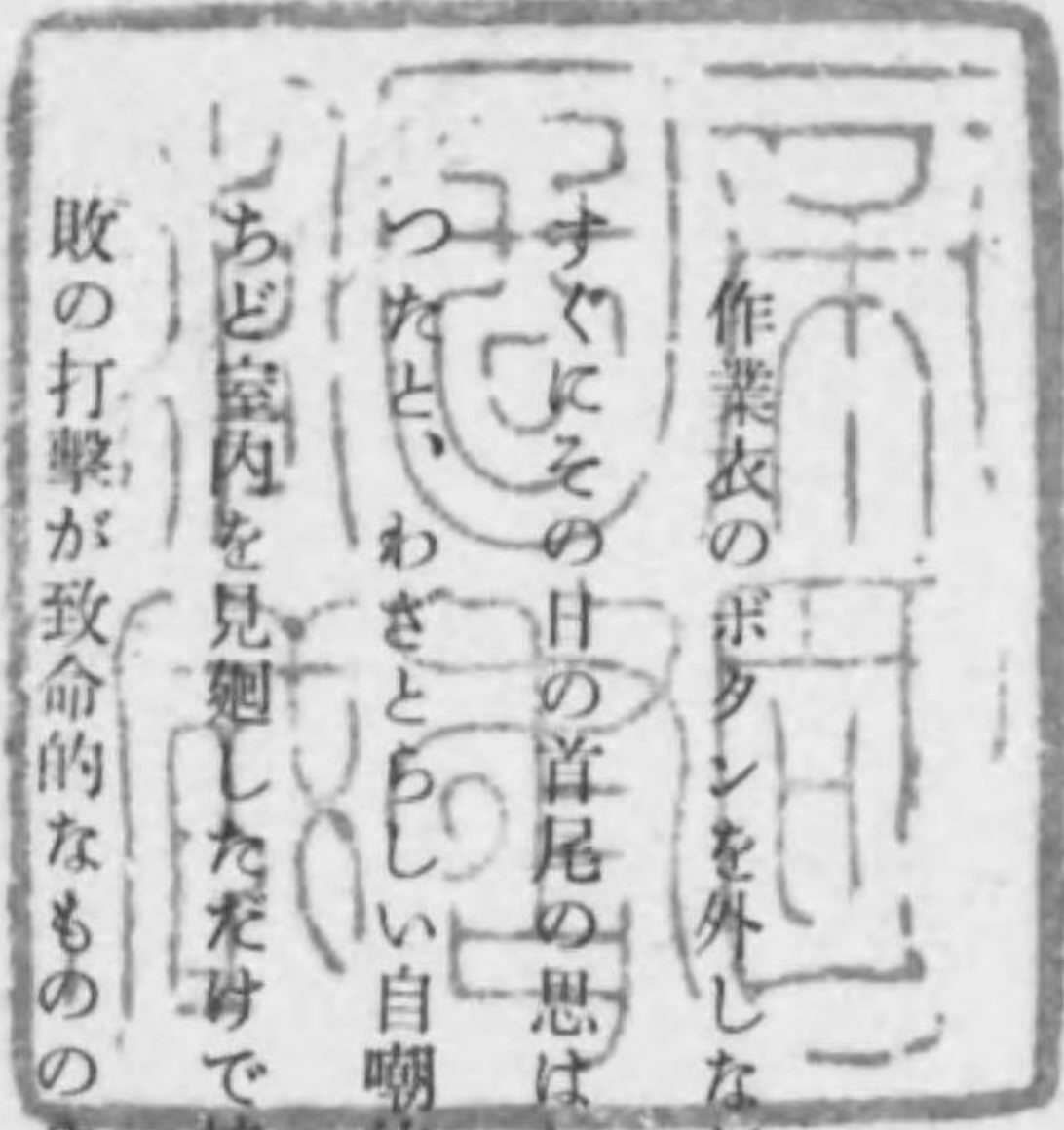
歲

月





第一章



作業衣のボタンを外しながら、事務室にはいつてきた草加の蒼い顔をひと目みた私は、すやにその日の首尾の思はしくないので見てとつた。いつもなら今日もやつぱり駄目だつたど、わざとらしい自嘲的な微笑を浮べ、わけもなく歩き廻る彼であつたが、ただいまだ室内を見廻したを以て椅子に腰を下し、深深と考へ込んでしまつたさまからは、失敗の打撃が致命的なものやうにも想像された。修繕機關車の試運転を兼ね、出て行くときにはまるで青年のやうに、今日こそ吉報をもたらすと断言したが、そのやうな若若しさがこの五十何歳かの技工長の何處にひそんでゐたものかと、全く不思議にしか考へられなかつた。それが何時間も経たないうちに、急に十歳も加へたやうに憔悴して見ら



れるのにも私の驚きはあり、留守中についた書状を手にしながらも、私には差出すことが出来なかつた。暫くはそのままにして置いてやりたい氣持であつた。この二年來、技術係として彼の下で働いてきた私にすれば、何もかもわかつてゐるつもりであり、いはば大それた「軌道探傷器」の考案などといふものが、さう簡単に出来あがるとも思へないにしろ、その完成がどれほどの意義を持つかに思ひ至ると、あらためてその日の失敗も人事ではなくなつてくる。若し彼が初めから、場合によつては今からでも計畫をうちあけてくれたなら、學校で得た技術には過ぎないけれど、積極的に協力しようといふ氣持を私は持つてゐた。それはひとつには、三十年餘の彼の職場生活が、機關車修繕を主として眞劍につづけられてきたばかりではなく、その間にも數數の機械の考案がなされてゐる點に敬意を表するがためでもあつた。

明治三十八年、上野機關庫の組立工を振出した彼が、大宮、田端、國府津、安房北條、千葉などと轉轉しながら考案した機械は、實に十指にあまつてをり、私の就職後にしあ

げたものさへ三つもあり、現に新しいものにもかかつてゐる。その第一は、機關車の「汽罐水壓試驗器」と呼ばれる、從來の手押ポンプの改良に成功したものである。それで高められた作業能率は素晴しく、ずつと三十分もかけなければならなかつた仕事が、同じ人力で五分を要しないやうになり、機械の製作費も極めて低廉だといふので、特に本省から「在來のものが尠からざる努力と、時間を要するのを遺憾として刻苦研究試作をつづけ、遂に該器を完成せしめたるは職務上誠に殊勝なり」として表彰され、五十圓の賞金まで貰つてゐる。その第二は、「草加式ユニオンレンチ」と命名された出来あがりの簡単なものだが、これも馬鹿には出来ない。ユニオンナットの締付や緩解に際し、これまでものでは溝や山角の磨耗のため、十分な機能が發揮されない、そこで「之が改良に苦心を重ね、構造簡易なるユニオンレンチを考案」したのである。ユニオン接手の締付時間を半減し、危害豫防の理想にもかなつてゐて、一石二鳥に成功したといへるであらう。その三つは、「連結棒缸歪削正器」である。クランクピン缸の内部の削正には、



その都度、連結棒をボーリングマシンまで運搬しなければならず、水平を定めるに大變だつたが、この機械のために機關車のある現場で實施されるやうになり、修繕作業を益してゐる點では、いささかも前二者に劣つてゐない、そして現にやつてゐるのが「軌道探傷器」の改良である。これは名稱でもわかるやうに、軌道の傷を探知する器具で、動力式と手動式の二種類がある。普通は小さな臺車などに装置し、一時間に三軒ぐらゐの速度で運轉すれば通過軌道の横傷、縦傷が発見出来る。肉眼では全然見えない内部の傷までわかる有名なものでもある。草加の計畫は、その機能を、不良軌道の位置から、少くとも數百米手前で發揮し得るものにしてしようといふところにあつた。これが若し可能ならば、單に保線作業にしか役だたなかつたものが、運轉事故の防止にも大きな役割を演ずるやうになる。たとへば、列車の前途に水害で流されたところがあつても、曲線の向ふに崖が崩れてゐても、その他の障害の場合にも、機關車乗務員は、豫め制動の手配がとれる、と彼はいつてゐた。これは誰にも理解され、激勵の言葉さへ惜しまぬものもあ

つたが、成功を期待するものもないことも事實である。私も學校では幾らか電氣をやつてきたが、全く見當などつかなかつた。容易ならぬ仕事である。ただそのやうないはば大それた野心が、小學校へもろくに通つてゐない、従つて機械製圖一枚書けない、技工あがりの技工長の胸にあるのだと思ふと、本ばかりで技術家になつたつもりでゐる私などは、恥づかしい氣持にさへされるのであつた。ばかりでなく私は後に、そのやうな野心を彼がいだくに至つた事情を知るに及び、いつさう同じ感を深くしないではゐられなかつた。

伴の戦死が動機だといふ。それには私も驚いたが、彼の一人息子の十郎が、四ヶ月前に戦死したのは誰もが知つてゐる。その十郎は、五年にもなる機關車乗務員で、同じ機關區で私なども顔見知りの間柄だが、事變勃發の直後に鐵道部隊に召集された。そして占領鐵道の運轉に任じ、間もなく京漢戰線に散華したのである。せめて事變が片づくまで、生き残つて働いてくれればよいのに、といふのは何處の親にも變らぬ彼の口癖であ



つた。

その日も彼は話の冒頭に、あやしげな憤りに震へる唇で、支那兵チヤンゴクがその時くらゐ憎らしく思へたことはない、と通知を貰つた當時の感慨を洩らしたが、ちよつと私には慰めの言葉もなかつた。

然し彼はやがて誰にもあまり語つたことのない戦死當時の状況を話してくれた。それによると十郎は、私たちの想像とちがつて列車の運轉中に襲撃されたのではなく、敵の弾丸に倒れたのでもなかつた。ただ運轉中には間違ひなかつたが、前途の闇のために敵に破壊されてあつた線路を発見することも出来ず、発見したときにはすでに制動距離が足らなくなつてゐて、脱線するのを見てゐるよりほかに仕方がなかつたらしい。悪いことには片側が高い崖になつてゐたので、あの巨大な機關車もんどりうつて轉落して行き、それと十郎も機關士も運命を共にしてしまつたのだ。

「それでも何だよ、好きな機關車に乗つて國のために死んだのだから、満足してくれて

ゐるだらうと思つてるがね……」

少年の頃から機關車乗務員に憧れてゐたといふことは私もきいてゐたが、そのやうに附足す口惜しげな彼の表情から空想される状景は、全く私の唇を閉ざしてしまはないで置かなかつた。私は眼をつぶつて故人の冥福を祈つた。

然し彼は暫くすると突然に自分自身にもいひきかせるやうな重々しい調子で、

「これが探傷器を思ひたつた直接の原因だよ」といつた。

私は瞬間の彼の面持をいつさう切ないものに眺めたが、初めて知つた探傷器考案の動機にはただ頭を下げるよりほかに仕方がなかつた。

彼は次には静かにいつた。

「それからも同じやうな事故は度度起つてゐるらしい、犠牲者も或程度までは避けがたらしいね、敵も匪賊もゐない内地にだつて運轉事故は絶えないのだから、やむを得ないかも知れない」



返す言葉もなく私が相槌ばかりうつてみると、ちよつと彼は祈るやうに眼をつぶつてから、幾らか、自嘲的になつてつづけるのであつた。

「正直なところ俺もまだ探傷器には自信がない、電氣の経験もないし、何もない、費用も相當にかかるだらうし、さう思ふとよけい不安にもなつてくる、結局は齒の立たないことかも知れないね。」

「そんなことはありませんよ」

さうした根據のない私の言葉にも、相手の胸に響くものがあつたのだらうか。次第に兩の頬の影が消えて行つた。かと思ふと突然にももの狂はしいやうな口振で、出来るかどうかやつてみよう、死んだつもりでやつてみよう、それ以外に俺の生きる道はないやうな氣もするんだ、といふのであつた。私はそのときの彼を忘れることが出来ない。全身からひとつの精神の塊が感じられた。まだ歸還してない英靈を慰めるためにも、新たな占領鐵道の運営にあたつてゐる兵隊のためにも、國內での運轉事故の減少のためにも、

その「新軌道探傷器」の完成が、どんな大きな意義を持つものであるかといふことを、あらためて述べる必要などないやうに思はれるのであつた。

それから二ヶ月ほど経つてゐる。その間私はいちども進捗振りをきいてゐない。きいても打ちあけてはくれないのである。いつも苦しい笑顔をつくり、今に見て貰ふから、と話題を外らしてしまふのが常であつた。私もあまり口にしないやうになつた。いつでも別に反感を持つたわけでもない。かへつて動機に思ひ及んでは、彼ひとりで完成することの美しさまで空想し、私なりに楽しんでゐたのである。

然し私は英靈についてだけは忘れることがなかつた。葬儀にもひと役買つて出たかつたし、さうするのが部下の義務だとも思つてゐた。彼は口辭に今に歸つてくるだらう、と問題から遠ざかるやうに答へるばかりである。激しい焦躁感へ、別の氣がまへがいつしよに見られる。それは不可能だとわかつてゐながらも、歸還までに完成せしめようとする氣持の現れにちがひない。初めの頃とは反對に、英靈の一日も遅いのを私が願ひだ



したのは、それが日増しに切實にわかつてきたからである。

けれども彼の場合はほかに煩はしいことがあつた。いろいろの蔭口が耳にはいつてくるのである。それは恐らくは彼の業績を羨むものの宣傳からであらう。たとへば今度つくられた機械は、彼の本當の考案ではなくて、何何式の特徴を盗んだものにちがひないとか、そのまま形を變へたに過ぎないとか、業務の餘暇にたくさん部下に手傳はせたものだとか、何れも根も葉もないことのみである。もつとひどいのは私などにも面と向ひ、彼の考案した數數の機械のために、どんなに他の従業員が迷惑してゐるかわからない、といひ、新しい機械の出現が、作業の能率を高めると同時に、人員の節減に及ぶのは當然だし、やがては失業者が増加するにちがひない。これをどうするつもりかとまで訴へる。彼の耳にもはいつたのであらう。いちど私に相談しかけたこともあつたが、即答出来なかつた私を見て考へ込んでしまひ、それからは殊更に同じ問題に觸れようともしなかつた。

最近の國內事情の急變が、さうした彼の立場に幸ひしたのは勿論である。支那事變が彼の杞憂を單なる杞憂に終らせた。従業員にも澤山の令狀が配られ、物資の移動が激しくなるに伴ひ、列車の運行回数も増し、人手はいくらあつても足らなかつたから、自然彼の機械も喜ばれるやうになり、新しいものへの期待も大きくなつてきたのである。

或日私は晝食後の休憩時間に、事務室の机を隔てて煙草をくゆらしながら、同じ問題を持ちだしてかういつた。

「この頃は私も愉快ですよ、悪口ばかりいつてた連中が、てんで顔色にも出さなくなりましたからね、そのうち、いい機會をつかんで、特に悪質な奴だけでもベシヤンコにしてやらうと思つてるんです」

すると彼は薄い唇をゆがめて複雑な微笑を浮べながら、

「人の噂などどうでもいいと思つてゐたが、やはり何だよ、さういはれると嬉しいよ」と答へたが、それが腹の中からの言葉なのはよくわかつた。



私は更に幾らか大まかにいつた。

「もう遠慮する必要などありませんからね、どしどしやつて下さい、誰のためでもないみんなのためですよ」

「ありがたう」

彼は何回も小刻みに首肯いた。然しその骨張つた頬のあたりのものはしげな影は消えなかつた。

「いちど、君の考へもよく聞いてみたいと思つてゐたんだが、つまりその機械の問題さ、俺はずつと、幾ら機械が進歩しても、それで人間の生活が行きづまるなんて夢にも考へてゐなかつたのだが、一時的にしろ、さうでない場合があるといふことがわかつた、どんな小さな仕事でも、いつもさういふ問題と關聯させて考へてみる必要があるんじゃないかね」

「然し、それは現實が解決してくれつつあるんじゃないでせうか、私にはさう思はれま

すね、それでいいとも思ふんです」と私は面映いものを感じながら答へた。

彼は靜かに呟いた。

「さうだね、少くとも戦争をやつてゐるうちはだね」

「さうぢやないでせう、私には今度の戦争で別の世界が生れるやうに思へるんです、世の中といひなほしてもいいです、その世の中がどんなものかといふことになる、私も困つてしまひますが、とにかく、あんたの收めた成果が十分に生かされるやうな時代です、若しそれが來なかつたら、いやつくり出せなかつたら、戦争をやる意義なぞないぢやありませんか」と私はいつた。

彼は容易に肯定する様子も見せないでゐたが、暫くするとやさしい笑顔を見せてくれた。

「そんなことになる俺にはよくわからん、然し俺はつづけるよ、やりかけた仕事だけは完成させる……理窟ぢやない、仕事だからね」



「本當ですよ」

いつしよに私も笑つてしまつた。それは急に變つた彼の態度や言葉が可笑しかつたからではなくて、わかりきつた事柄を、高い聲で話してゐたに過ぎなかつた自分に向けたつもりなのである。

「これからは君にも世話にならなければならないと思ふが……」

さういふ彼の語尾を奪ひ、

「そりやもう、何でもかまひません、いひつけて下さい」と私はいつた。

これは私の本音である。若し彼が仕事の糸口でもあたへてくれたなら、持つてゐるものは何もかもさらけだして協力するつもりであつた。その尊敬すべき人物がすでに五十何歳かの老齡に達してをり、何といつても次第に憔悴しつつある事實には私も考へざるを得なかつた。よく彼は私の實地技術を向上させるために、暇をみては古い表紙の擦りきたれたノートや、バラバラになつてゐる手帳などまで取出し、度のつよい老眼鏡をかけ

て職場内を案内してくれてゐるが、その様子からはやはり急に老けてきた感じしか受けとれないのである。疲れてゐるやうなときが特に甚だしい。そのまましたら、ちきに倒れてしまひさうにさへ見えることも屢々であつた。

私は彼の健康を保つことに關心を向け始めた。それが差しあたつて手つとり早い協力の方法であつた。私は事毎にあまりつめてやらない方がいいといつた。探傷器の完成のためにも、仕事の指導を受けるもののためにも、さうして貰はなければ困るともいつた。すると彼は、その度にきまつて子供のやうにかぶりを振り、幾らかわざとらしく喰ふだけのものを貰つてながら、遊んでゐては申しわけない、といひ、天職に殉ずるのが自分の本望だと、ききいれる様子も見せない。それには老人の多くに見られる狷介な性格さへも窺へるのであつた。

然し私は同じ忠告をやめなかつた。日中の仕事も忙しくなるばかりなのに、毎日、數時間も職場の寒い片隅に居残るやうになつた頃私はいつた。



「若しかのことがあつたら誰がいつたい英靈を迎へるのです、一日や二日を争つても仕方がないぢやありませんか」

それには彼もちよつと驚いて仕事の手を休めたが、

「大丈夫だよ」と自分自身にいひきかせるやうに呟いただけであつた。

同じ日が暮れかかつてから事務室に引きあげてきた彼は、豫定通りに仕事すすんだらしく、先に歸つてくれればよかつたのに、と機嫌のよい微笑を浮べていつた。

「ああ出られたのには參つたが、俺はやはり伴は伴、仕事は仕事だと思ふんだよ」

「ですから私はいそぐ必要はないといつてるんです」

彼はよけいに笑つた。

「俺はもう伴がつくまでにしあげようなどとは思つてやしないよ」

「なら、夜業をやめて下さい、體にはいぢばんいけませんからね」

「さうもいかん、晝間は別の仕事を持つてるし、夜のほかにやるときはないだらう」

「然し……」

「まあ、いい、俺は勝手にやつてるんだから、體ももつだらうと思ふ、もたなかつたらそれまでだよ、君の好意は非常に嬉しいが、さう心配しないでくれ給へ」

それは重ねての私の言葉を許さないほどに冷く響き、いささか反撥も感じられたけれど、また別の機会もあるだらうといふ氣持で私は黙つた。然しその後も意氣込んだ計畫が次次に失敗に終るのを私も氣づいてゐた。寒くなると遅くまで職場に居残ることも出来なくなり、殆ど自宅が使はれるやうになつたが、毎朝の挨拶を交すときの態度や、技工たちの中で修繕作業に従事する様子などにも、彼自身には何ともしがたいやうな焦りが見られた。彼の一喜一憂の表情ぐらゐハツキリしてゐるものもなからう。彼がよい機嫌でお喋りをつづけるのは順調に仕事のすすめられてゐる證據であり、大事な話にもろくに返事をしない場合は反對である。その點徹底してをり、たとへば相手がどのやうなえらい人であらうと、就職したばかりの若い見習であらうと變へない頑固なところがあ



る。そこに好意をいだいて慕ふものも少なくないが、多くは近寄りきれなくなるやうである。機嫌のわるいときなどは、私などでも初めから敬遠することにしてゐた。

そのやうな日は何日もつづいたことがあつた。時間中働きつめては挨拶もしないで歸つてしまふのである。そしてまた翌日も同じやうにして、誰の話相手にもならない。飯も喰はない。機關區長に呼ばれても、よくよくの場合でない限り、自ら出て行かないやうなところも見せてゐた。具合がよくないから、と夫人の使ひで休暇をとることも多くなり、それでゐて私たちが退ける時分になつて、被覆線のからみついた大きな機械を、リヤカーで運んでくることもあつた。出来あがつたのかとたづねても、ちつともよい顔を見せないで、人氣のない車庫の奥にはいり込み、こつこつと獨りでやつてばかりゐた。同じやうなことは屢々繰返された。その度に彼の不機嫌の度は深められて行くやうであつた。窪んだ眼の底に光る瞳に、あやしげな鋭ささへ感じられるやうになつた。蒼い頬も著るしく骨張つてきた。さうなると、再び私の懸念がその健康に向けられ勝でもあつ

たが、不思議にさうなつてゐる状態から完成の日の近づいてゐるやうにも考へられ、何れかといへばもつと現実的なことの方へ及んでしまつた。それは他でもない。ちよつとではあるが、何回か運び込まれる試作の機械を見せられてゐるうちに、いつも新しい材料が使はれてあることから、ふとその資金に困るだらうといふことに氣づかないではゐられなかつたのである。今度の場合は「汽罐水壓試験器」や「草加式ユニオンレンチ」等の場合と異り、電氣を動力とするだけに、職場内の廢品を利用出来る部分が少い。全然ないといつてもよいからである。そして多くの電氣用品が、一サラリーマンの収入では、どんなに高價であるかといふことを知つてゐる私には、その容易ならぬ經濟生活を思ひやることのであらうであつた。

そこで私は、もつとも機嫌のよささうな或日のこと、事變後の物價高の問題から切り出し、それとなく事情をきいて、場合によれば父にださせてもいいと思つたので、さう誘ひをかけてみた。私も下宿住居の身分だつたが、使途さへ明らかにすれば少しは都合



の出来る自信があつた。さうした私の氣持を理解して、初めは彼も笑ひながら相手になつてくれてゐたが、次第に眞剣になりだすと、突然態度を變へて若いものに迷惑をかけたくない、といつて拒むのであつた。それが私には、若いものの厄介にはなりたくないといふやうに響いた。

「若いも何もないぢやありませんか、私はこれまでの御恩返しのもりです」といささか中腹でいつた。

すると彼もさすがにびつくりしたらしく顔色を變へた。

「君の好意はありがたい、本當に濟まないと思つてゐるよ」

「それなら使つてくれてもいいぢやありませんか」

「然し……まあ、待つてくれ、俺には何だよ、君のお父さんに金を借りる資格などひとつもないからね」

「かまはないぢやありませんか」

「さうかな」

「それで探傷器が完成されれば、きつと父だつて喜んでくれます」

暫く彼は考へ込んでゐたやうだが、

「とにかくこれは、あとの話にして貰はう、勝手なことばかりいつて濟まんが、今のところ大丈夫だよ、俸給だけでもやつて行けさうだからね」といつた。

それでも私にはすすめることが出来なかつた。私は總べての好意を退けられる淋しさを感じながらも、その態度にいつさう尊敬の念をいだかないではゐられなかつた。彼の肉體の中の激しさに觸れたやうな喜びでもあつた。そして私は結局は、入用になつたら何時でも相談してくれるやうにと頼んで話を打切つてしまつた。それからの一ヶ月が、同じ問題で親しく語り合ふ機会もなく平凡に過ぎてきただけに、現に失敗して歸つてきた彼の、窓硝子に凝と見入つてゐる瞳や、頬杖にした片腕の太い靜脈の線や、一文字に結んだ唇などが、よけい切實に映するのであつた。



もの三十分も経つたであらうか。やうやく彼も室内の寒気に氣づいたらしく立ちあがり、椅子にかけてあつた上衣を着ながら、初めて私を見て意外さうな表情をつくつた。

「先に歸つてくれてもよかつたのに、濟まなかつたね」といふのである。

ホツとした私も、立ちあがりながら手にしてゐた書狀の束を差出し、

「明日にしますか？」と伺つた。

すると彼はチラと一瞥しただけで首肯き、身支度して出て行きかけたがすぐに引返し、

「見よう」と再び腰を下すのであつた。

機關車修繕についての圖面入りの打合書や方方の商會の型録や、會議の決議録などを封切つて覗いただけかたはらに積みあげてから、最後の大山みつ子なる女の手紙を取りあげた彼の掌が、ぶるぶる震へ出したのが私には見通せなかつた。中からはたくさんの便箋が現れ、餘程重大なものらしく、二度も三度も讀み返されてゐるやうであつた。時折獨り合點に首肯いてゐるさまも、ちよつと尋常一様には見られなかつた。顔色にも

腫にも態度にもいつにない生々しいものが感じられた。

急に雨の音がしだした。それでやうやく顔をあげた彼は、薄氣味わるい視線を私に注ぎながら手紙を封筒に収めてから、いつになくおだやかな表情をつくり、

「今夜、何か用事がある？」とたづねるのである。

私は首を振つて見せた。然し彼は瞬間首肯いただけで、すぐにまたもの思はしげに虚空を睨み始めた。容易ならぬことが持ちあがつたにちがひない、と私にも不安といつしよに胸に湧くものが感じられた。それでも彼はなかなか話したさうとする氣配を見せないで、眉根の皺だけが次第に眼に立つばかりであつた。

やがて私も拍手抜けの態で、考へ過ぎてるにちがひないといふ感もあつて、幾らか皮肉のつもりで、

「そんなむつかしい問題が起きたんですか」と誘ひかけてみた。

同時に彼は初めて自分に歸つたやうに眼ばたき、テーブルの上の制帽をつかんで立ち



あがつた。

「濟まないけどいつしよに来てくれ給へ、長い時間ぢやない、歩きながら話すことにしよう」

レインコートを肩にしながら時計を見あげた彼は、私の支度を待つて先に出た。外は身震ひの出るほど寒かつた。暗い車庫内の機關車から、シュン、シューと蒸氣の洩れる音がきかれたが、別に意にとめるでもない彼の足どりは思つたより早く、度をつよい眼鏡を用ひてゐる私には、あぶなくて肩を竝べることも出来なかつた。雨の中に明滅する色とりどりの信號灯や、標識灯をよそに構内を横ぎつて道路へ出ると、飯を食つてからにしよう、と彼は呟き、私の返事も待たないで、近くの穢らしい洋食屋へはいつて行くのであつた。仕方なく私もあとにつづいた。

## 第二章

かたいカツレッツに負けてがくがくする總入齒の感じからでもあつたにちがひない。食事中の彼の顔はひどく年寄りみて見られたり、思ひがけない童顔になつたりして私を微笑ませたが、食事が済むとやうやく先刻の手紙を取出し、こんな女がゐるのだがと呟いてから、いちど君に訪ねてみて貰ひたいがどうかといふのであつた。返事のしやうもなく私が手紙の差出人に見入つてゐると、急に彼は熱情的な口振になり、その女は去年退職した山邊要蔵といふ機關士の紹介で知り合ひになつたといふこと、女ながらも或鐵工所を經營してゐるなかなかの男まさりだといふこと、それに自分の必要から千圓の金を貸してあるといふこと、同時に今は取戻さなければならなくなつてゐるといふことなど



を物語るのである。暫くは私も意外な話に嘖然としてゐたが、すぐ千圓の金を出した。「自分の必要から」といふことと、「取戻さなければならなくなつてゐる」といふことが探傷器のためだとわかり、次第に乗氣になれるのであつた。さうなると私は、手紙を手にした瞬間だけであつたにしろ、彼にいただいた興味の淺薄さを恥ぢないわけにはいかなかった。

私はくはしい説明の終るのを待ち、金は山邊要藏を通じて渡したのかどうかといふことを質問することで、自然に問題への熱意を現した。すると彼は不安な態度で言葉に力をこめ、それはどつちでも同じぢやないか、と答へるのである。私は思はずいつた。「さうですかね、僕はその點も大切だと思ひますよ」  
「どうして？」

激しい言葉に面喰つたが、私は不思議にこれには彼より大人が意識されだし、少しもゆづる氣持になれなくなつてゐた。然しまた私は山邊の手を通じてさへあるなら、女に

返済の能力がなくなつても大丈夫だと斷言することも出来ない。正直なところ、探傷器にでも關係がないならば、そこでどうして千圓もの大金を女などに用だてたかと責めたいくらゐであつた。その金は恐らく彼の三十年餘の鐵道生活の結晶であらう。たとへば實際に股販産業への投資で、ぼろい金利を見ての所業であるにしろ、それ故にいつさう草加のやうな人物が、やるのが不思議に考へられてくるのであつた。

然し今はそれを詮索する場合でないと思つた私は、無遠慮に千圓にたいする利息と貸借の契約期間をきいてみた。明らかな當惑の色が相手の頬を掠め去るのを私は見通さなかつた。私は返事が待てないで促した。

「幾ら面倒になつても私が衝にあたりますよ、いつて下さい、職場さへひければ私には用がない人間ですから」

すると彼はすつかり他人行儀になり、何度も吃りながら、毎月五十圓づつ貰つてゐると答へた。高利を意識しての狼狽が、震へるやうな眼眸に感ずることが出来た。すつかり



私は、不愉快な訊問者の立場に置かれてしまつたが、そのまま打切るわけにもいかず、その五十圓を何回貰つたかときいてみた。

相手はてれ臭さうに煙草まで取出していつた。

「まだ二度だよ……」

「いつまでの約束です？」

「來年の六月……その時はまた契約をしなければさうといふ約束だけはしてある」

それは大變だと私はいつた。すると彼は急にテーブルの上へ乗り出すやうにして、實は先月分が來ないので催促するともう少し待つて貰ひたいといふこと、このところ忙しくなるばかりで頗る好景氣だといふこと、従つて資本は幾らあつても足らず、時にはもつとよい利子が拂へると思ふが、よい人があつたら紹介してくれないかといふことなどを、返事してきたと訴へるやうに説明してから、少し變だと思ふがどうだといふのであつた。言下に利子の延期と増資とに矛盾のあるのを指摘すると、忽ち彼はしほれ込んで

しまひ、

「いつばい喰はされたかしら？」と私の顔色を窺ふのである。

私は答へなかつた。その代り一日も早く元金を取戻すに如くはないと強調し、自分も出来るだけのことはするといつてやると、彼は別人のやうに機嫌のよい笑顔をつくり、助けると思つてさうしてくれと掌を合はさんばかりになり、口を迂らせて、その日の探傷器の試験が全く失敗なのを物語り、その千圓の残つてゐるのがせめても幸福だといふのであつた。そしてこの數ヶ月間に使つた研究費もほぼ同額に達してをり、材料も再用の餘地のないことを知らされ、あらためて容易ならぬ仕事であるのに驚かないわけにはいかなかつた。

私はさりげなく失敗した計畫の内容をたづねてみた。然し彼は幾らかいつもの彼らしい風格を見せただけで苦笑し、馬鹿馬鹿しくて話にならない、と避けてしまふのである。それでも今度は眞剣に、



「私などには大變参考になると思ふんです、是非きかせていただけませんか」

彼はあわてて鼻のさきで手を振つた。

「飛んでもない、参考だなんて、それはもう失敗も失敗、大失敗なのだから……」

「かへつてその方がいいですよ、學校でもどこでも、旨い話ばかりきかされて育つてきたんでずから」

初めて相手は聲をたてて笑ひ、

「電氣の人から見たらひどいものでね、話にも何にもならん、勘辨して貰はうよ」とくだけた拒みかたをするのである。

暗い食堂の電燈にもぎらぎら光る額の汗に、ただ祕密にするためだけでないのがわかると、私にも一抹の淋しさが感じられたけれど、それは新しい計畫があるかどうかといふつづけての質問になると首肯してくれただけで消え去つた。それでも私には萬一の場合も豫想されたので、再び英靈の事を持ち出し、遺骨の到着に無頓着になれといふ意味

からでなく、別に急がないでやつてくれるやうに頼んだ。これにも彼はしみじみ聞入つてくれたやうだが、その強い眼眸は硝子戸越しに、激しくなるばかりの雨の中へ向けられて動かなかつた。氣づけばあたりには火の氣ひとつなく、二人とも肩をすぼめてテールに兩肘をつき、寒寒と向ひ合つてゐた。

近く大山みつ子を訪ねることにして私たちは立ちあがつた。すぐにでもよいと思つたが、突然に私ひとりでは信用されさうにもないし、いざといふ場合の良策をねつてからの方が、賢明のやうに考へられたからである。

雨の中へ出て歩きだすと彼は思ひついたやうに小聲でいつた。

「今日の話は女房には黙つて貰ひたいんだがね、よけいな心配はかけたくないと思ふから」

私は首肯して見せた。然しその「今日の話」といふのは、大山みつ子に金を貸した事實を指してゐるのか、返して貰ふための相談のことなのか、何もかものことなのか、ち



よつと判断がつかなかつた。

その中には話した方がいいかも知れない、といふ意地わるい氣持もあつて私はいつた。

「いちど、奥さんにも紹介していただきますよ」

「それほどの女でもないよ」と彼は若者のやうなてれかたで呟いた。

風が出てきた。踏切で別れた私は、しつかと洋傘を支へながら暗い路地へはいつて行つたが、いつまでも彼の夫人の顔が見える感じであつた。獨り息子を戦死させた母親の氣持の切實さと、仕事以外に何もなしの生活に同伴する夫人の苦勞とが、どんなものかわかるやうにも思へてくるのであつた。

雨にうたれたのがわるかつたのか、その夜から草加が寢込んだといふことを、私は近くから通つてゐる技工に知らされたが、ちぎりに出られさうな話でもあつたので、別に見

舞にも行かないでゐると、思ひがけなく夫人が訪ねてきた。彼が缺勤しだしてから二日目であつた。

夫人は小柄で色の白い上品な婦人であつた。私の倍にも近い年齢だといふのに、まだ若若しく美しいのは、やはり子供の少なかつたためでもあらうか。それでゐてどこかつましいところもあつて、私は姉にたいする氣輕ささへ感じたくらゐである。外は寒いからといつて中へ案内しようとしても、かへつて身を引くやうな態度には、良人の部下にたいする何物も見出せなかつた。

あと二、三日もしたら、全快するだらうと夫人はいひながら草加の手紙を差出した。變つたことがあつたら知らせてくれといふ内容である。返事を書くほどでもないと思ひ、私は何氣なく職場の方は心配しなくてもよいことと、先日のは一兩日中にお目にかかつて報告したいといふことの傳言を依頼した。

すると夫人は伏眼がちに首肯してから、急にあたりを憚るやうな小聲できき返してき



た。

「その先日の件と申しますのは、お金のことではございませんか」

これには私も面喰ひ、暫くはどうしたものかと迷つてゐたが、すでにかうなつたらかくす必要もなからうと考へなほし、

「さうですか、よくご存じですね」といつた。

夫人はちよつと頬を染めながら、

「お恥づかしい次第で……それこそ、いろいろと入用なのがわかつてゐるものですか……」

「草加さんが仰言いましたか」

「いいえ、決して、私なぞに話してくれるやうなひとではございません、やはり自然にわかつて参ります」

憂ひに變つた面持から、何もかも知りつくしてゐる夫人を私は見出すことが出来た。

その金が相當の巨額で、妙なところで使はれてゐることまで、承知してゐるのがそれからの話の節節でも想像され、かへつて私には氣易いものさへ感じられてきた。やがて私はいつかの草加の口止めにもかかはらず、總べてを打ちあけてしまふと同時に、それがなかなか簡單ではなさうだといふことと、二度も紹介人の山邊を訪ねたのだが、まだ會へないでゐることなどを話してやつた。すると夫人は大變な恐縮振を見せたが、簡單にいかないとなるとどんなことになるかといふ。そして更に、私も一日も早く十分な材料が欲しいと思つてゐるものですから、勝手ばかり申しわけありません、と附足すのであつた。期限に達しないのがいちばん困るが、出来るだけよい手段をとつてみるといつても、いつさう確かなところをつかみたいのであらう、本當に大丈夫かどうかと聞き返してくる。

雪にでもなりさうな寒さに私の方がたまらなくなり、手を取らんばかりにして室内に招き入れ、ストーブの近くの椅子をすすめても、容易に腰を下さなかつた。すぐ歸らな



ければならない、と繰返すのである。そして石炭をくべて出て行く小使を見送つてから、突然に、あんな機械が本當に出来るもんでせうか、といつて私の顔を窺ふのであつた。

さすがに私も躊躇したが、

「普通では容易ぢやありませんね、然し出来ないといふことはないでせう。それに草加さんの場合はこれまでも立派な経験をお持ちになつてをりますからね」といはないではゐられなかつた。

夫人は微かな溜息を吐いた。

「私には不安でなりません」

「そりやもう……むつかしい仕事なのは事實ですよ」

「初めのうちは、それほどでもなかつたのですが、最近はもう、脇で見てゐるのも辛くなりました。何回、やりなほしてきたかわかりませんが、その度に新しい材料が必要になりました、私には何もわからないもんですから、ときには情なくなつたりしまして……」

次第に高まる感情を抑へてゐるのが氣の毒にも見え、私もつひ誘ひ込まれて、

「さうでせうね」といつた。

夫人は自らを勇氣づけるやうに笑つた。

「もう少し考へてさへくれればよろしいのですが、幾ら世の中が變つても無頓着で……」

「然し奥さん、草加さんも眞剣ですよ、その點では私など恥づかしいくらいです」

「いいえ、決してそんなこと……草加のやうでも困ります、たしか自信も持てないのに、人様に迷惑ばかりかけてゐると思ふと、齒痒くてなりません」

私は稍よ激しい調子で、

「それでいいんですよ」といつた。「たとへ草加さんが全力をつくしてですね、それに奥さんや私が……いや私などはものの數でもありませんが、とにかく協力しても駄目だつたとしますね、想像するだけでも残念ですが、そのときはそのときのことです、もつと有力な人が援助してくれるかも知れませんが、仕事を引きつぐひとが現れないとも限り



ません、何れでもやり甲斐がないとはいへないと思ふんです」

夫人はかたくなに俯向いたまま、何度も片掌のハンケチで眼瞼を覆つてゐた。言ひ過ぎに氣づいた私がどうにもならないで黙り込むと、やがてしやくりあげながらいふのであつた。

「お言葉の通りです、よくわかつてゐるつもりながら、つい愚痴が生まれて申しわけありません」

「……」

弱弱しい風情から轉じた私の瞳には、ふと戦死者の顔が映し出された。よく似てゐる顔だと思ふと、同時にまだ行つたこともない戦場らしき風景までも現れ、敵弾下を走行する機關車の上で加減瓣のハンドルを握り、けはしく前方を見まもつてゐる姿や、重い車輛のために必死になり、石炭を焚きつづける機關助手を激励するさまや、四方からの敵の攻撃に、機關車の窓から應戦してゐる瞬間から、曲線の彼方に装置された秘密防害

にひつかかり、顛覆するに至るまでの動きが彷彿としてきた。私は切ないもので胸を満たされる感じに襲はれてゐた。眼の前の夫人がその母であるのを思ふと、同じ感は深まるばかりであつた。長長と述べた意見がましい言葉も、單なる言葉に過ぎなかつたやうに思ひ返されて私は恥づかしくなつた。そして初めの高い調子の話振も、つまりは置かれたところから落ちまいとする、意識的な心の張りの現れであるのもわかつてきた。それは當然であらう。

私はいつた。

「ねえ、奥さん、遺骨がついたら出来るだけ盛大な葬儀をやりませう」

驚いてあげた夫人の顔が、一瞬ものものしく光つたが、私はつづけてたづねた。

「通知でもきませんか、だいたいこの豫定日でも……そろそろ、半年になりますからね」

「はあ……でもまた、戦地のことですから、どんな事情があるかもわかりませんし、そのうち、原隊へ伺つてみるつもりでをります、若しつきましたら……」



何なら原隊へ行つてあげてもいい、といふ私に、夫人は禮の言葉だけ述べながらよろよと立ちあがつた。ゐたたまらないのであらう。靜かに着物を正してから、つまらぬお喋りばかりして濟まなかつたといつてあらたまり、お金の話を私が知つてゐることを、草加に黙つていただきませう、と附足すのであつた。瞬間、私はあの雨の中で同じやうなことをいつた草加の顔を思ひ出した。總べてを理解し合つてゐながら、金の問題についてだけ警戒する兩者に私は慄つたいものを感じた。やがて瀧の如くに流れる幾條ものベルトをくぐり、轟然たる中を伏すやうにして出て行く夫人を見送ると、急に私は草加に會ひたくつた。然し休憩時間までには相當時間もあるし、大山みつ子にも會つてゐないのに氣づいて後日にすることにした。

同じ日の退けどきに近い頃である。再び私は草加夫人の訪問を受けた。歸り支度で出て行つてみると、夫人は別に變つた様子も見せず、會釋を寄越し、急用らしくもなかつたが、

「度度濟みません……」と呟いた様子には、何かやはり私へのこたはりが感じられた。ストーブを中にして向ひ合つても、つとめて私は相手の顔を見ないやうにして、それとなく要件をたづねてみた。すると夫人はよけいに深深と俯向いてしまひ、こんなことまでお願いしてよいのかわかりませんが、と斷つてから暫くして氣まづさうにいふのであつた。

「飛んでもないお願いでございますが、實は今度の會計日まで、少しご都合していただくわけには参りませんか……さきほどお願いすればよろしかつたのですが、ついいひそびれてしまひまして……」

私の視線は自然に夫人に向けられてゐた。ちよつと判断に苦しめられたのである。初めは例の金を、早急に幾らかでも取戻してくれ、といつてゐるのではないかと思つた。さうでないのがわかつて、すぐに信じられなかつたものである。それと察したらしい夫人は、よけいに顔をあからめて、出來たら二十圓ほどで結構だといつた。それだけの



金を懐中してなかつた私が、明朝でもよければ届けるといふと、夫人はあわてて自分が伺ふからと辭退した。これから山邊要藏を訪ねて、どうせ報告にあがらなければならぬのだからと話しても、なかなか承知しさうにない。そこで私は草加に内證にしてゐるのだと悟り、ざつくばらんところ突つ込んだのである。

「奥さんにそつとお渡しすればいいんでせう」

夫人は顔もあげないで、お願ひしますと呟いた。こみあげる悲しみをこらへてでもゐるやうに、兩肩が微かに動いてゐた。私はわるいことをいつたと思つたが如何ともしがたい。さうして暫くは話題もなくなつてしまひ、息苦しい感じにさへ閉されてしまふのであつた。まだ電燈のつかない、薄暗い中の夫人の顔が、私には痛痛しいまでに佻しかつた。ひとつの不幸といふものが、獨立した形でそこにあるやうにも思はれた。それは單に金のための苦勞だとか、金さへあれば遁れられるとかでない、満ち足りつつあるやうな宿命でもあらうか。

私たちはやがていつしよに事務室を出た。すでに工場の機械もとまり、技工たちの姿も見えなくなつてゐた。夫人のあとから、動かないベルトの間をくぐつて行くと、冷え冷えとしたものが背筋に感じられた。

「また叱られるといけませんから」

事務所の脇の道へ出ると、夫人はわざとらしく笑ひながらお辭儀を繰返した。何故叱られるのかもわからなかつたし、初めてのときになかつた他人行儀の見られる原因もわかるやうでわからなかつた。

私は歸途を山邊要藏の家に寄るつもりで、夫人とは反對の方へ向つたが、いつまでも夫人がかたはらに肩をすぼめてゐるやうに思はれてならなかつた。奥さんも大變だと、最後にいつてやつた言葉も、容易に私の頭から離れない。その時の、私などはもう、と薄ら笑ひを洩らした表情も忘れられなかつた。解體された六ヶ月検査の機關車を前にして技工たちを指揮する草加の風貌とを思ひ合せ、私はそれでよいと呟いた。



### 第三章

その日も山邊は不在であつた。代りに、まるで老婆といった感じの妻君が、前回のときのやうに暗い奥から足音もなく玄關に現れた。彼女は度度の私の訪問を警戒するやうに、ぞんざいな言葉使ひで朝出たままだといひ、出たら最後いつ歸るかわからないとも呟いた。それなら都合のよい日時を約束して貰へないだらうかと頼むと、暫く私の制服姿を眺め廻してゐたが、自分にはいま何ともいへないが、何なら用事を主人に傳へ、希望に添へるやうにはからつてもよい、といふのである。これには私もたちまちとした。彼女は私が金を借りにきたものと獨りきめしてしまつたにちがひない。然し私はすぐに職場内できいたことのある噂などを思ひ出し、別に不愉快な氣持にもされずに済んだ。

同じ制服を着た仲間が、同じ場所で、同じやうなことをいはれてゐるさまが、かへつて微笑ましく想像されたくらゐであつた。

私は山邊に金を借りてゐる仲間の少くないのを知つてゐる。現に草加のところにも、病人だとか葬式だとかいつては、相談にくる技工も相當あつたし、その多くの話を、草加が山邊に取りついでゐるのも事實である。今日に始まつたことでもない。三千餘の退職金を握つてゐる山邊にすれば、すでに勞働の出来る年齢でもないし、利子さへちやんとはいれば、といふ腹になるのもやむを得まい。さうして五十圓、六十圓と、盆と暮のボーナスを抵當に取つてだすやうになり、いつしか商賣人にもなりきつて、妻君にまで及ぼしてゐるのも當然だらう。

そこで私は、さりげなく相手の肩越しに奥の方を覗きながらきいてみた。

「ご主人に直接申しあげたいと思ひますが、明日の夕方伺つたら如何でせう？」

「さうですね、たいていゐるでせうけれど……」と彼女は無愛想な顔になる。



私は殊によると居留守を使つてゐるのではないかと思つたがどうすることも出来ない。その結果が變に私も興奮してしまひ、會へるまでは何度でもくる、といつた態度を稍と露骨に示したが、相手もまた相手で、ただひとの都合ばかりきいてはゐられない、といはんばかりの態度であつた。

然し翌朝いつもより小早く起きた私が、二十圓の金を下宿の女主人に借り、草加を訪ふつもりで出たのを思ひなほし、再び寄つてみたときにはすつかり變つてゐた。靜かに格子をあけただけでそれと知つて現れた彼女は、若若しく白い割烹着までつけてをり、不思議に機嫌のよい顔を見せた。全く前日とは別人の感があつた。

「今日はまた随分お早いですこと……さあ、どうぞ」

さういひながら通路をあけるために、障子のかげへ身をひいた様子に、私は思はずツクリとした。變に氣味のわるい感じも残つて、ちよつと靴も脱ぎきれない氣持であつた。それでもやがて寒寒とした奥の部屋に案内され、質問される出勤時間や職場のこと

などを答へてゐるうちに、いつしかさうした不安も消えてゐた。反感もなくなつてゐた。煙草の灰皿と茶を運んだ彼女は、今主人は食事中なので暫く待つてくれと兩掌をついてから出て行つたが、そのときから私は、やはり退職従業員の妻君だといふ親しみさへ持ち始めたやうであつた。

「お待たせしました」

湯呑茶碗と座布團とを兩掌でひとつづつ持つた山邊要藏が、どてら姿の腰をかがめてはいつてきた。あわてて居すまひをなほさうとする私をまあまあと制し、投げ出した座布團の上にどつかと腰を下したさまには、いささか私も度膽を抜かれた態であつた。ふと私は、彼が家にゐるかゐらないかで、訪問者にたいする態度が全然變る、妻君の氣持がよくわかるやうな氣がした。それでも向き合つてからする、度度の不在への釋明のしぶりから、どことなく在職時代の親しみが感じられるのは、妻君の場合と同じであつた。ばかりでなく、ときとして光る小金貸らしい眼眸も、昔ながらの美しい白髪や、血色の



よい頼などのために、あまり脈味として映らなかつた。

私はさつそく要件を切り出した。すると彼も如何にももつともらしくきいてゐたが、やうやく大山みつ子なる名が出ると、急に乘氣になり、私の語尾を奪ふやうにして、

「この二、三日、私がお家をあげたのもその女のためですよ、いや本當にひどい目にあひました」と残念さうにいふのであつた。

私もつり込まれてきき返した。

「大山みつ子がどうかしたんですか？」

「いや、どうもかうもないですよ、實際たいした女でね、今度ばかりは私も、すつかりいつばい喰はされた態です、考へるだけでもう自分に愛想がつきてきますよ」

それは心からさう思つてゐるらしく、あやしげな唇の震へも憤りのためであるのが理解され、あらためて私は自分の引受けた仕事の困難さを感じないではゐられなかつた。

私はいつた。

「草加さんの話では、相當しつかりものだといふことですが、案外さうでもないんですね」  
「しつかりものにもいろいろありますよ、よい方にも、わるい方にも。大山みつ子はその後者の徹底した見本ですな」

そして彼は毒でも唾棄するやうな調子で、これは同じ鐵工所に働いてゐる男にいつばい飲ませてきいた話だがと斷り、大山みつ子はすでに表面上の經營者ではなくなつてゐるといふこと、代りにもと地方新聞の社長などをしてゐた吉野良作なる人物が現れたといふこと、二人の間にはあやしげな關係が結ばれてゐるばかりでなく、それは相當以前からつづけられてゐたものらしく、そこから彼等の策略が生れてゐるのは明らかだといふこと、金は鐵工所經營者としての女の信用であつめられたのだが、すでに當人の自由にはなくなつてゐるといふこと、等をこまごまと語つてくれるのであつた。そして最後に戦時には珍しくないことだが、こんな手に引つかつたんでは世間の笑ひ草になりますからな、と僅かだが肩をそびやかさせた。



きけばきくほど草加の話とはちがつてくるし、一時に知らせたせぬもあらうが、俄に納得出来ないで私も質問を發してみた。

「といふとなんですね、その大山みつ子より、結局、吉野良作を相手にしなければならなくなりますか」

山邊は如何にも子供にでもたいするやうに笑つて、

「そんなことはありませんよ、もともと地方のゆすり新聞の社長ですからね、鐵工所は自分の名にしても、借金までさうしないのはわかりきつてゐます、やりかたが眼に見えるやうぢやありませんか」といつた。

それには私も同感した。

「初めの話は知りませんが、とにかく相手は女だつたんでせう、それに草加さんばかりでなくあんたまで手だまにとられてしまつたんですから、どう考へても容易な代物ではありませんね」

「いや、蟲さへつかなければ何でもない女ですよ、こつちがそれに気づかないのがいけなかつた、私は女の亡くなつた主人とは友達でした、昨日や今日のつきあひぢやないんです、その主人といふのも前には機關庫に勤めてをりましてね、やめてからももう十年にもなりますが、その妻君を私が信用したといふのも、つまりは亡くなつたものにまで感じてゐる友情が忘れられなかつたからです、少しく人が好過ぎたかも知れませんが」

「本當に——然し憎むべき女ですね、どのやうな蟲がついてゐるにしても、昔の主人の友達を陥し入れるなんて……」

「それも私ひとりならまだ我慢のしやうもあるが、こつちの信用まで利用して、あんたのその草加君ばかりでなく、何人にもださせてあるんですからね」

思はず私も聲を高め、

「ほう、まだほかにもゐるんですか」ときき返した。

相手は思案げに顔を動かしたがすぐに答へた。



「私の知つてゐるだけでも六人ゐますからね、私にすればこのままでは濟ませない氣持ですよ」

知つてゐるだけ、といふのは草加の場合のやうに間にはいつた事實を指してゐるのであらう。そこで私は何氣なくその六人といふのはどのやうな人かとたづねてみた。すると彼もすでにかくす必要もなからうからと前置し、はつきりと藤井達郎、森田三左衛門、大畑覺藏、青田信彦、深山哲夫、村田温一郎等の名を擧げて私をびつくりさせた。多分私も山邊のことだから、職場のものが多からうと考へてゐたが、全部が全部さうだとは思ひもしなかつたのである。その藤井達郎といふのは、間もなく停年になる草加の同年輩の機關士で、〇〇鐵道會社引繼以來、一切の仲間づきあひまで避けて金をためてゐる男である。省内共済組合の貯金部にあづけてある金だけでも、二千を越してゐるといふことであつた。森田三左衛門は、まだ四十がそこそこの機關士ではあるが、七、八年前に東北地方の或驛長をしてゐた父を失ひ、同時にその退職賜金をそつくり手に入れ、最

近に住宅まで新築し、いはば他の従業員の羨望の對象になつてゐる。大畑覺藏と青田信彦の二人は、何れも炭水手の古參株で、家では相當手廣く百姓をやつてゐるとかで、國鐵から支給される給料を毎月つみあげて、今では大きな數字を握つてゐるであらうと噂されてゐる。そして深山哲夫と村田温一郎の二人は、幾何の日給も貰つてゐない機關助士だが、何回受けても機關士の試験に合格しないと、揃ひも揃つて子供のないことなどから發奮し、數年前から貯金に志したといふことである。以上の紹介でもわかるやうに、それ等の人人の將來への見透しなり、持つてゐる金の性質なりから考へると、私にはやはりよく出したものだといふ驚きしか感じられないのであつた。然も相手がわけのわからない女であるのを思へば、同じ感は深くなるばかりである。

私は若干迫るやうに山邊の顔を窺ひながらいつた。

「六人にあんたと草加さんですね、それで總額はどれほどですか」

さすがに山邊も狼狽の色を見せたが、そのまま機嫌のわるさうな表情をつくり、初め



て亂暴な口振で、

「私のは別として、草加君の千圓のほかは、六人で……五百圓づつ出して貰つたんだから、三千圓だね」といつた。

そこで私も思ひきつていつた。

「ねえ山邊さん、私には草加さんがほかの人の倍額を出してゐる氣持がよくわかるんです、金が不用だからではなくて誰より必要だからですよ、その點を特にお考へ願はなくちやならないと思ふんです」

「といふと？」

「出来るだけ早く取戻してやつていただきたいと思ひます」

突然、山邊は妻君に茶をいひつけた。そして手にしたままの茶碗にいつばいの茶をつがせてから飲み下し、妻君が出て行くのを待ち、思つたよりおだやかにいふのであつた。

「とにかく、今少し、待つて貰ひませう、様子を見る必要もあるし、或程度まで私も責

任を持ちますから安心して下さい、然し何ですれ、草加君にもよく傳へて貰はなくちやなりませんよ、つまりその金のことですれ、金は別に草加君から私、私から大山といつた具合に動いたわけでもない、利子だつてさうですよ、大山と草加君との間で勝手にやりとりが行はれてゐるんですからね、私にはその利子が實際幾らなのかもわからなくなつてゐる始末です、それに今更何もかもかぶせられたんではかなはない、といふわけですら」

これには私も一時は返す言葉もなかつた。初めから懸念してゐた問題ながら、いはれてよけいに立場のわるいのが理解され、仕方なく相槌もうつたけれど、次第に白ける場の空氣には堪へられないものが感じられた。貰つた利子は二度だけだといふことにも氣づいたが、やはり私には口にする事が出来なかつた。



失敗に終つた何度目から探傷器を前にし、氣持の上からも手の出なくなつてゐる草加の風貌が思ひだされたとき、やうやく私も更に協力をもとめるつもりになり、急にその金を必要とするに至つた事情を繰返してからいつた。

「こんなことは申しあげるまでもありませんが、草加さんの努力とか苦勞とかいふものは、探傷器の出来あがり考へると決して個人的なことではないと思ふんです、若輩の私がそれを買つて出た理由もそこにあるわけですが、ひとつあなたにもお骨折願へないでせうか、いろいろな行きがかりも水に流していただけませんか、本當にお願ひしたいと思ひます、その探傷器が果して完成されるかされないか今のところ想像もつきませんが、草加さんでなければつづけられない仕事であるといふことだけはわかつてゐます、そしてその金ですね、その金が取戻せなければ全然駄目だといふこともハッキリしてゐるのです」

「夢のやうな話ですね」

嘯くやうにいふ相手に私はよけい反對の態度に出た。

「私も初めはさう思ひましたよ、然しあんたもご存じの筈です、前の汽罐水壓試験器の場合もさうでしたし、その他のときも同じでした、誰も彼もが笑つてたぢやありませんか、その中で完成させたのを考へてみて下さい、きつと探傷器もしあげますよ、それに今度は動機がちがふといふ點もあります、その熱情つたら素晴らしいものです」

「いや、よくわかりました、その熱情には私も前前から感心してましたよ、然し物事は熱情だけぢやどうにもならんでせう、草加君だつて年齢も年齢だから、それくらゐのこととはわかつてゐる筈でせうにね」

「ですから、まあ山邊さんにもお願ひしてくれといつてゐるんです」

さういふ私の語尾を彼は別人のやうな性急さで奪つた。

「私のいひ分もきいて貰ひませう、いいですか、正直なところ私はその軌道探傷器なんでもものは草加君が單純に考へてゐるやうなわけにはいかないと思ひますね、實際に機關



車を運轉した經驗に徴しても容易ぢやないですよ、これまでも大學まで出たひとが随分目をつけたといふが、それが全部失敗でせう、現在の探傷器だつて十分に機能を發揮させるにはなかなかの伎倆を要するんだから當然ですよ、たとへばその探傷コイルだね、鐵心中の磁力線の變化をキャッチするにしてもむづかしい、電流計や真空管を使ふにしても思ふやうにいかない、それが出来なければ従つて軌道の傷も發見出来ないわけだからね、だから探傷器に關する眼の前の問題は、どうしたら現在の探傷器が活用出来るかで、草加君が考へてるやうなものぢやない、いはば草加君の夢みたいなものんでせう、さうぢやありませんか、水壓試験器やユニオンレンチなどは少しぢがひますからね」

「そりやちがひます、ちがふところに草加さんの熱情も、私の關心もあるわけです、お言葉の探傷コイルの問題も草加さんにはよくわかつてゐると思ふんです、實際鐵心中に磁力線の變化をキャッチするのはむづかしいですが、それでもやれることはやれますかね」

「ね、そこに實用化の問題が起るのは私も當然だと思ひますが、然し同時に、新しい機能を持たせるための研究も必要でせう、單に時期が早いといふだけでは無意義にならないと思ひますが如何でせう、むしろ私は、さうした研究がいつさう實用化を早めることになる、と信じてをります」

「なるほどね、それもひと理窟ですな、結局草加君の勝手な仕事だから脇から何といつても仕方がないので黙つてゐますがね、考へると私などは残念でたまらんですな、てんであてのないものに、殆ど一生かけてためた金を注ぎ込んでしまはうといふんですから」

「然し……」

口ごもつた私を不意に笑ひかぶせた彼は、すぐに失禮失禮と繰返し、てれくさげに白髪に掌をあげた。笑ひながらも私の態度に氣づいたのであらう。

やがて彼はくだけていつた。

「議論はこれくらゐにして、これからいつたいどうしたらよいですかな」



「……」

「あなたもこのままちやお困りでせう、かうして折角きたんですからね」

「大山みつ子に交渉していただくわけにはいかんでせうか」

瞬間、相手の瞳がとまつた。

「もちろん交渉してもよいですが、どういふもんですかな、期限にはまだ相当日数がありませんからね」

「それはもう何です……そこをひとつ何とかお願いしたいと思ひまして」

相手は暫く、當惑げに考へ込んでゐたが、

「ちや、どうです、これから二人で行つて見ませうか」といつた。

私は途迷つたまま首肯いた。

「その方がいいでせうか」

「いいですとも、さうすれば殊によると相談に乗るかも知れないし、それに話もしよい

ですよ」

「さうですね」

職場の方も気がかりで曖昧な返事になつてしまつたが、相手はよけい乗氣になり、實は私も今日は是が非でも會つてやらうと思つてゐたのだといつて促すので、つい私もそれではと立ちあがつた。

山邊はすつかり意氣込んでしまつた。毛の抜けた廻しを肩にひつかけるやうに着て、同じやうに時代がかつた中折帽を無造作に冠つて玄關に降り立つた恰好は、どこから見ても小金貸らしい感じだが、通りへ出て近くの小型タクシーへどかどかとはいり込み、若い運轉手に倍賃出すからと交渉したさまには、まるで別人のやうなすさまじさを感じられた。この男が、つい最近まで百圓足らずの月給を貰ふために、夜晝かまはず機關車に乗つてゐたのだとはどうしても思へない。

小型のクッションは二人の腰を並べるに足らなかつた。彼も窮屈さうに黙り私も暫く



何か考へ込んでゐた。然しやがて、海岸に近い最初の十字路を右へハンドルがとられたのに、どうやら反対らしいことに気づいた私が、工場へ行くのではないのかとたづねると、相手の顔にはちよつと微笑が浮びあがり、同時に、兩腕を組みながらいふのであつた。

「病氣を理由にして海岸にゐるんですよ、小さな別荘を買ひとつたといふことです、これは或場合には私たちのためにもなるが、それにしてもどうも私には臍に落ちない點が多くてね、慎重にやる必要がありますよ、下手すると虻蜂取らずに終つてしまふかも知れませんか」

「といふのはどういふわけですか？」と私はきいてみた。

相手は何かいひかけたが、すぐに運轉手を警戒するやうに顎をしやくつて見せ、急にわざとらしく笑つた。

「とにかく表に出てるのは女ですからね、始末がわるいのも事實ですよ」

「いつたい幾つぐらゐの女ですか？」

「さうですね、まだ四十にはならんでせう、然し一時は荒くれ男を使つてゐただけであつて、なかなか手に負へないところもありますね、油断のならない女です」

さういふ顔を又もや微笑が掠め去つたが、よけい眞剣になりつつある現れにちがひない。うまく會へればよいがと、やがて私は取つてつけたやうにいつたが、そのときはもう彼は首肯くばかりであつた。それから私は海岸通りをひた走る自動車の動搖に身をまかせながら、左手の美しい砂原に眺め入つてゐたが、不思議な世界へはいりつつある自分しか意識することが出来なかつた。若干の獵奇的な氣分にさへ捉はれてゐたことも事實である。もちろん金も問題だが、そのあやしげな女に會ふだけで無駄足にならないやうにも考へられてくるのであつた。然し不意に脊のクッションから體を起した山邊が、あそこだと硝子越しに指したあたりに、白白と陽を照りかへしてゐる松林を見たときは、思はず私は胸のときめくものを感じた。



山邊は私の耳に唇を押しつけるやうにしていった。

「場合によつたら、ひと芝居うつて見ますから、あんたは草加君の代理だといふことを名乗らないでゐて下さい、いいですか、つまり友人ですよ、得體の知れない人物になつて貰ふ、大學出の金満家の坊ちゃんらしい態度がいいでせうね」

苦笑しながら私は首肯した。そして松林の入口で自動車を捨てた私たちは、歩きにくい砂地を辿つて行つた。恐らく山邊も同じだつたにちがひない。私は間もなく私たちの眼の前に、附近の風景にふさはしい立派な別荘風の建物の現れるのを期待してゐた。然し實際に私たちが渚近くの別荘の並びから見出した、「大山」なる表札のかかげられてある家は、静かな潮風に新しい木材の匂ひこそ發してゐたが、別にこれといつて取り立てるべきほどのものではなかつた。その邊のサラリーマンの借家より、幾らか広い庭を持ち、安物の植木なども見られ、しやれた石の門のあるのがまさつてゐる程度であつた。

それ等をチロリと一瞥し、づかづかとはいつて行つた山邊は、無遠慮に玄關のガラス戸をあけた。

「ごめん」といふである。

すると間もなく如何にも田舎者らしい十五、六歳の女の子が顔をだし、きちんと兩掌をついてお辭儀をした。

「奥さんはおいででせうな」

押しつけるやうにいつた山邊は、返事もしないで女の子が引つ込んでしまふと、廻しの片袖を軽く脊中へ投げあげながら私の方を見てニヤリと笑つた。

長いこと待たされて通されたのは海の見えない八疊の部屋であつた。そこは女主人の居間にでもなつてゐるらしく、新しい箆笥や鏡臺が飾りたてられてあり、つよい脂粉の



匂ひさへ残つてゐて、たとへばどんなに短い期間であつたにしろ、鐵工所の主人として働いてきた女の部屋だといふ感じはなかつた。變に空空しく明るい。私が差出した煙草も手にしない山邊は、不愉快さうな顔つきで何度でも室内を見廻し、その度にわざとらしく鼻を鳴らしたり、舌うちしたりするのであつた。

やがて思つたより品のよい大柄な美しい女が現れた。大山みつ子である。見たところ年齢よりはすつと若い、私たちと視線を合せた途端に微笑んだ愛嬌のよさや、縁の近くに自分の席を見つけて靜かに坐るさまには、やはり四十ちいかと思はれる落ちつきが感じられた。山邊の言葉には初めから含むものもあつたが、別にさからつてくるやうなこともなかつた。山邊はまたそれをよいことに、今どきこれくらゐな家を手にいれるのは大變だらうとか、殷賑産業にでも携つてゐるものでなければ出来ない藝當だとか、思ひきつてすばすばいふものだから、相手も次第に迷惑げな色を現し、無理に笑つて見せようとしたり、伏せたまま顔をあげないで避けてゐた。然し間もなく私は、さうした

彼女がいつしか先手を取り、鐵工所から手を引くに至つた事情を物語ることで、要件を切り出さうとする機會を巧みに奪つてゐるのに氣がついた。急激な世の變化から、今ではもうあんな鐵工所でも女の手に負へなくなつてゐるといふこと、同時に信頼するに足る有力者が現れたので、そのひとに何もかもまかせる氣になつたのだといふこと、それから彼女自身は暫くここで靜養させて貰ふつもりだといふことまで、可成りてきばきと物語るのであつた。そしていつさうきちんと居すまひをなほし、先日も草加さんにお願ひしたんでございますが、まだ資金さへ豊富になれば、幾らでも仕事の伸びるのがわかつてゐるものですから、その方面で働きたいと思つてをります、と場合によれば更に相談を持ちだしかねまじき勢ひを示した。それには私もあきれ、暫くは全く色つぼさの失はれた横顔から腫を離せないでゐたが、ふと山邊はと見ると彼も二の句がつづかないと見え、長い眉根を寄せてゐる。訪問の途中に感じた頼もしさなど微塵も見られない一瞬であつた。



それでもやがて彼は、年輩らしい複雑な微笑を浮かべながらいひ放つた。

「奥さんとその有力な人との関係ですが、なにか特別なことでもおありですか」

私はびつくりして山邊の顔を見た。そしてその平然たるさまによけい驚きを感じながら大山みつ子に視線を移した。それにはたしかに期待したやうなたろぎも見られたが、不思議に不愉快なものは感じられなかつた。單純な羞恥の現れのやうにも思はれたが、如何にもわざとらしいあらたまりかたで、ただ仕事を引きついで貰つたに過ぎないと、辯解した口振には、必要以上の激しさが感じられた。山邊はちよつと首をすくめるやうにして、

「もう工場の名儀は變つてゐるんでせうな」といつた。

大山みつ子は思つたよりハツキリ答へた。

「變つてをります」

「その方の名をおきかせ願へませんか」

「吉野と申します」

「吉野？」

「はあ」

「これまでどんな商賣をやつてゐた人ですか？」

若干の山邊の狼狽に女も氣づいてゐたやうだが、

「工場の經驗などないひとですよ、と申しましてもだいたい商人ですから、いいとなればすぐ始める、さういつたひとのやうですわ」

「奥さんはよくご存じないんですか？」

「はあ」

山邊の腫が私の方へギロリと光つたかと思ふと、

「どうです奥さん、その吉野さんに紹介して貰へませんかね」と女の顔を覗き込んでゐた。



女は反對に顔をあげた。

「さうしていただければあの方も喜ばれるにちがひありません」

「さうですか、そりやどうも……さつそくお願ひしたいですな」

「これからでございますか」

「左様——」

脊を丸めるやうにして首を突き出した山邊の態度には、女も一瞬拒みきれないものを感じたらしいが、すぐさま曖昧な態度をつくり、いつでもよいが向ふの都合もきいて見なければならぬだらう、といふ。さすがの山邊もそれでもといふわけにもいかず、目をあらためることに譲歩してしまつたが、同時に私に眼配せを寄越し、何もかも打ちあけて頼んでみたらどうかといふのであつた。私は途途の彼の策略的な意見とを思ひ合せ別に感ずるところがあつたのだらうと考へ、それではさうして貰ふことにしようと思つた。廻りくどい山邊の説明は十分以上もかかつたであらう。その間大山みつ子は如何

にももつともらしい相槌ばかりうち、私にも變に同情的な視線を寄越してゐたが、まるでその人事のやうな態度を見てゐると、何れが債権者なのかわからなくなつてしまふのであつた。私は年輩の女の圖圖しさといふものを、初めて見せられた不愉快さを忘れることが出来ない。最後に探傷器考案の動機が物語られたときにも、わかりますわかりますと何度も首肯き、感激に堪へないといはんばかりの表情をつくつたが、やはりわざとらしさが鼻についてならなかつた。

然し私が山邊の語をついで乗りだすやうにしながら、

「いま草加さんの手に千圓の金があるかないかといふことは非常に重要な事です、單に探傷器の問題ばかりではありません、草加さん自身の死活問題になるわけですから……」  
といつたときにはすつかり顔色を變へてゐた。

そして暫く膝に重ねた兩掌に見入つてゐた。

「そんなお金とは少しも知らないでをりました、立派な地位にをられる方ですし、あり



あまつてるんならといふつもりでお借りしたんですけど、さう伺ふとすぐにでもお返ししなければならぬやうな気がいたします、でもなんですわ、本當に残念なことには、期限が来ないと私にもどうにもならないものですから……」

「いや奥さん、無理なことは私たちにもよくわかつてをります、わかつてをりますが、そこをひとつ、お願い出来ないうでせうか」

「さあ——」

「奥さんもご存じだと思ひますが、草加さんもああいふ方ですし、今すぐ寄越せなどといふ氣持は全然ないのです。何とか都合して貰へるやうに頼んでみてくれといつてゐるんです」

「よくわかりましたわ、でもその千圓となりますと、なかなかすぐといふわけには参りません」

勝算を見越してゐるらしい相手の落ちつきかたに思はず私も自分を忘れ、

「では、半分ぐらゐなら如何でせう？」といつてしまつた。

然し相手は變らなかつた。

「半分と申しましても五百圓ですから……」

「駄目ですかね」

「本當にお氣の毒ですけど」

ふと山邊の顔の動くのを頬のあたりに感じた私は、助言を待つつもりで口を閉ぢたのだが、その期待もつひに裏切られた。彼は床の間の安つぽい軸物に瞳を据ゑたまま深い考への中に落ち込んでゐるらしいのが、殊更にかたく一文字に結ばれてゐる唇に感じられた。それからはいささかも私の當面してゐる問題の解決のために、協力してやらうといふ氣持のあるのを窺ふことが出来なかつた。もつと重大な問題が、懸念してきたやうに自分の身にも迫りつつあるのだ、といはんばかりである。その彼の考慮が、先刻の大山みつ子の言に端を發してゐるのはいふまでもない。そしてすでに鐵工所の經營者が變



つてゐるといふこと、その経営者と大山みつ子との想像される関係、同時に當然行はれてゐるにちがひない負債整理についてのたくらみ、私を通じての草加の要求が謝絶されるのはその最初の現れに過ぎないといふこと、等に考へ及ぶのは山邊ならずも當然であらう。瞬間に私の網膜には、明日の暮しにも困つてゐる事實にも氣づかないで、ただ探傷器だけで頭をいつばいにして病床にある草加の顔に次ぎ、山邊を信じて貯金の通帳をはたいてしまつた人人の姿が映じだされた。それ等の人人が事の真相を知つた場合のいきまぐさまも容易に想像された。同時に私は草加の場合も、それ等の人人の問題といつしよに解決する以外に仕方のないことに氣づいた。そして私には、それまでに必要な金は、ほかから融通して置いてもよいやうに思はれたのである。

私はあらためて大山みつ子の顔を見まもりながら、

「ぢや奥さん何ですね、期限にさへなれば間違ひなく返していただけるといふわけですね」と念を押した。

すると大山みつ子は初めて仄かな笑顔をつくりながら答へた。

「そりやもうお約束でございますから、決してご迷惑などかけません、草加さんによく仰言つて置いて下さいませ、期限の當日には必ず私の方からお届けいたしますから……」

「いや奥さん、それには及ばんですよ、私たち多勢で押しかけてきますからね」と山邊が突然大きな聲で笑つた。

そして彼は相手の返事に困つた顔をチラと見てからあつさり立ちあがつてしまつた。

長居は無用だといはんばかりである。私も挨拶そこそこで立つたが、あとから玄關まで送つてきながら、折角のお出でなのにおかまひ出来ないで申しわけなかつたとか、ときどきまた遊びにきて貰ひたいとかいふ女の空空しさに、私は返事の出来ないほど胸のむかつくものを感じた。

外へ出ても山邊は黙つてゐた。いつさう機嫌のわるい顔をしてゐた。そして意氣込むときの癖でもあるらしい、廻しの袖を肩へ投げあげて、又もや私を石の門のところ以待



たせて置き、チロチロと見廻しながら家を一周してきた。それがどういふことを意味してゐるのか、だいたい私にも想像出来たが、さうした行動から察せられる彼によけい私は興味が感じられてたしかめる氣にもなれなかつた。その日の訪問の目的を、すっかり自分自身のこと置き換へてしまつてゐるらしい態度にも、不思議に私には悪い感じがいただけなくなつてゐた。

「造りだけは堂堂としたもんだが、さう新しくもないね」

幾らかてれくささうにいひながら道路へ出て行く彼が、いつたいどれほどに値ぶみしてゐるものか訊いて見ようと思つたが、さすがに氣がひけて言葉も出なかつた。その代り私はふと、たとへどんなに價値のあるものにして、それが大山みつ子の名になつてゐなければなんの役にも立たないことに氣づき、それとなく彼に持ちかけてみたものである。それは然し私の杞憂であつた。彼は私の言葉の終るのを待たないで、その點はちやんと調べてもあり、看視の手配もとつてあるから大丈夫だと、案外正直なところを見せ

た。話のついでだと思つた私は、その看視の手配とはどのやうな事かとたづねたのだが、それだけは笑つて答へなかつた。

「あの店でちよつときいてみようぢやないか」

一軒置いて隣に煙草だけ賣つてゐる店がある。彼は袂から藁口をだしながらはいつて行つた。そしてべしやんこに坐つてゐる老婆の手から朝日を受けとつてから、如何にもさりげない態度で問ひかけるのであつた。

「この頃は大山さんの旦那もさつぱり見えないうやうですが、どうしたのかお婆さんはご存じありませんかい？」

すると老婆は暫く彼を見あげてゐたが、

「そんなことねえだよ、今朝もゐたやうだよ」といつた。

山邊はもつともさうに首肯した。

「その旦那といふのは、町で鐵工所をやつてゐる人ださうですな」



「知らねえ」

「いつ頃からその旦那が大山さんのところへくるやうになつたか知りませんか？」

老婆は怪訝さらな腫を彼から表にゐる私に移したが、

「さうだね、もう、よつほどになるべえよ、あんでも浴衣を着てるのを見たことがあるだから、夏だつた頃はちがひねえね」

「幾つぐらゐの人ですかい？」

「そろそろ五十にもなるべえかな」

「名は？」

「わからねえだよ」

今にも怒りだしさうな老婆の顔をよそに、ぢやとろくに禮の言葉も述べないで出てきた彼は、やつぱりさうだよ、と若干得意さうに私に言つた。

#### 第 四 章

かうなつては女を相手にしても仕方がないから、近いうちに吉野良作に會ひ、たしかなところを決めて置かうと山邊はいつたが、それだけでは差當つての草加が困るばかりでなく、ちよつと顔向け出来ない氣持もあつたので、晝近くに職場へ出た私は、使ひのものに二十圓渡して夫人に内證で届けるやうにと頼み、すぐに暇を貰つて歸郷した。私の家は汽車で一時間もすればつく町にあつたが、米穀商を営む父に事情を話し、二百圓の金をだして貰ふのに三時間以上もかかつた。そのやうなことは初めてでもあり、なかなか父も信じてくれなかつたが、信じないまままだす氣にもなつたのであらう、私は金を手にするとその夜のうちに引きあげてきた。



翌る朝すつかり寢込んでしまつた私が、あわてて草加の家を訪ねたのは、すでに出勤の定刻に間もない頃であつた。町の北端にある蛇ヶ池の近くにある草加の家は、夫婦二人きりの住居らしく小ぢんまりしたのだが、相當に広い庭もあつてそこには夫人の手になるらしい野菜畑も見られた。家の中はひつそりと人氣も感じられない。變だと思ひながら聲をかけると、すぐに玄關の障子があき、意外にも草加自身のむつかしい顔が現れた。すつと剃刀も使はないと見え、頬から顎へかけての無精髭がものしかつたが、私と知ると俄に機嫌のよい笑顔になり、いま女房を使ひにやつたばかりだといひながら招じ入れる。時間がないからと斷つても承知しない。一時間やそこら遅れてもかまはん、とさへいふのである。

正面に神棚のある六疊は夫婦の茶の間らしく薄暗い。急に外からはいつたせぬもあつて暫くは何も見えないくらゐ。然し彼は奥の間の襖をあけようとせず、それでもむさ苦しいところで濟まんがと呟きながら、長火鉢の前に座布団をすすめるのである。そし

てせかせしかしくかたはらの短い煙管に「あやめ」を詰込み、向ふの様子はどんなかとたづねてから、火鉢の中へ顔を突つ込むやうにして火を點けてゐた。それは、明らかに私の返事の如何を氣にするあまりの動作にちがひない。一刻も早くききたいことはききたいのだが、ひと言で駄目だつたといはれてしまふのも恐ろしい、そのやうな懸念からである。

それが證據には、最初の一服を深深と吸ひ込んだ彼は、吐きだす暇も氣になるらしくつづけていふ。

「またかと笑はれるかも知らんが、どうやら見當もつてきた、今度こそ大丈夫だ、本當にこの三日三晩といふものろくに眠ることも出来なかつたが、仕方のないときは仕方のないもんで……あとになつてよけいなことを考へてゐたのに氣づくわけだ、可笑しいね、然しもうすつかり元氣になつたから安心してくれ給へ、あとは材料さへ手にはいれ  
ばいいんだから……」



それには、私も切りだしにくく、だからといつて事實と反對のことを告げることも出来ず、私は相手の顔を見ないやうにしながら前日の一伍一什を物語り、最後に二百圓の紙包をおそろおそろ差出して見た。話の途中から腕を組み、私のひと言ひと言にもつともさうな相槌をうつてゐた草加の視線も、瞬間に震へて伏せられたやうであつた。

然し私は、

「もちろんこの金は、私がおあなたに差しあげるものではありません、一時、使つて貰ふだけですが、大山みつ子が寄越したときかへしていただければいいんです、親爺ともさう約束して置きましたから、どうぞ遠慮なく……」

草加は下唇を嚙みながら考へ込んでゐたが、

「こんな迷惑をかけるつもりではなかつたのだ、困つちまふな、俺にはどうしたらよいかわからんよ」と當惑さうな色を浮べた。

私は笑ひながらいつた。

「まあひとつ收めて置いて下さい、その代り私は大山みつ子の方を根氣よく責めてみますから」

「さうして貰つたらこの上ないが、君が見たところどうだらう、かへせさうかしら？」

「大丈夫、貸した金ぢやありませんか」

「そりやさうだが、見込みがないやうにも思へるね」

「どうしてです？」

「どうしてつて、初めから計畫的らしいからさ、うつかりあてにしてゐると、あとでまたひどい目に會はされるかも知れない」

「いや、その點は安心して下さい、私も出来るだけのことはやりますし、それに山邊さんだつてついてゐるんですから……」

「然しこつちがはが少しく多過ぎる、實際に誰もこんなことにならうとは思はなかつたらうがね」



そして彼は初めに私が擧げた債権者をもういちど教へてくれといひ、私の言葉に従つて指を折りながら、藤井達郎、森田三左衛門、大畑覺藏、青田信彦、深山哲夫、村田温一郎と呟き返し、みんな慾深い連中ばかりだな、と微かに笑つた。それには私も笑ひだした。同時にさういつた連中が、同じやうなことを知つたらどんなにびつくりするであらうかと、私たち自身が當面してゐる問題を離れて、たいへん氣樂になつてくるのも事實であつた。草加を前にしては、口にこそ出来なかつたけれど、金に眼のない何人もの男が、いきまいて我さきにと、あの海岸の大山みつ子の家に押しかけるさままで私には想像され、あやしげな興味に囚はれないでもなかつた。人を騙してつくつた金ではない、一生かかつてためた金だ、耳をそろへてかへして貰はう、かへさぬうちは一步も動かん今更かへせぬとはいはさん、などと口口に喚きたてる姿まで眼に見えるやうである。實際にさうなつたらいつたいどうなることであらうか。

「草加さんなんかどう思ひますか、ただ金をためる以外に能のない連中が、揃ひも揃つ

て大金をだしてゐるといふことですね」といつて私はあわてて口を噤んだ。

瞬間、草加の眉宇も動いたが、たいして氣にする様子もなかつた。

「こんな時代にはやはり安利息で持つてられなくなるんだね、俺なんか同じだといはれても仕方ないが……」

「いや、我我の場合は別ですよ……」と私は否定した。

「こりや私にもわかりますが、これでもよくだしたと思ひますね、長いことかかつてこつこつためた金ぢやありませんか」

「それだけによけい早くふやしたくなるんだよ」

「さういふもんですかね」

「仕事の野心さへなければ俺なども同類さ」

私は黙つた。つまらぬことで、それ以上不機嫌にさせてはならないと思つたからである。私は時計を見て立ちあがつた。すると彼もいつしよに中腰になり、まだ話してゐて



もよからうといひ、疊の上の紙包を取りあげてから、これを本當に都合してくれるのなら、借用證を書くから待つてくれ、といふのであつた。借用證など飛んでもない、と退けても承知しない。

「君に借りるんぢやない、お父さんだから……」といふ。

「どつちでも同じです」と私はいつた。

「いやちがふ、借用證ぐらゐ書いて置かなくては俺の氣が濟まない、あとあとのこともあるから」

ではといふので再び腰を下した私は、はからずも大山みつ子に借用證を書かせたときの彼に思ひあたり、齒痒くもあるがそれもよからうといふ氣持になつた。一、二分もあれば出来るといつて立ちあがつた彼が、しきりと袂をさぐつてから、長い紐のついてゐる鍵を取出したのにはいささか私も驚いた。ずつと氣づかないでゐたのだが、その部屋を暗くするばかりのためにあるやうな襖の中央に、見れば大きな南京錠がついてゐる。

その他の襖は釘づけにされてある。さうするのが當り前でもあるかのやうに、一、二尺ほどあけて同時にはいつて行つた草加の異様な印象に、長いこと私は茫然としてゐた。襖は隣室に何かあるかもわからぬうちに閉められてしまつたが、研究室になつてゐるのにちがひはない。そして私にはたとへは探傷器の考案が、どんなに祕密を要する仕事であるにしろ、研究室に鍵までかけなければならぬ理由がわからない。然も夫婦二人きりの生活なのだから猶更のことである。まだよく人柄はわからないが、あの夫人がやましく仕事に口だしなどすると思へないし、よけいなことを他人に喋つたりすることなども考へられない。そのほかに理由らしいものもない。さうなるとただ私はわかつてゐるつもりだつた草加の性格に、新たな關心を向けたいではゐられない。幾ら仕事を手傳はうといつても、首を振つてゐたことや、出来あがつた試作品など決して見せようとしなかつたばかりでなく、何回かの失敗の事情すら説明するのを避けてゐたことから、いつも車庫の片隅に人眼を避けながら脊を丸めてこつこつやつてゐたことなど、さうし



た際の彼の姿も、結局は研究室に鍵をかけて閉ぢこもる彼の姿に變りないのがわかつてくる。何處でも彼は彼でしかないのである。私は草加のためにのみあるやうな夫人の生活振も思ひやる事が出来た。同時に私は次第に不愉快なものから救はれてゐた。

私は耳を欬てた。硯をする音がする。筆の走る音もする。咳ばらひもきかれる。私は次に襖があいたなら、ひと目でよいから、研究室の様子を見てやらうと思ひ、それからまた暫くは固唾を呑んでゐた。

それでも軀いつばいにしかあけないで、

「ぢや、これを頼む」と差出しながら現れた草加の向ふには、何も見ることが出来なかつた。

私は借用證をたたみながらいつた。

「今度の計畫もやはり祕密なんでせうね」

それにはさすがの彼も口ごもり、

「別に、さういふわけでもないが、あとあとのことを考へると、うつかり口にする事も出来なくなるよ」

「けれども大丈夫は大丈夫なんでせう？」

「さうだね」

「ひとつ、さつきの勢ひでやつて下さい」

「やるやる、間違ひなくやるよ」

私は笑つた。

「しつかりやつて貰はないと、私がお株を奪ふかも知れませんよ」

「ぢや、競争だね」

初めて草加も例の童顔で笑つた。自信たつぷりに。そして立ちあがつた私を送りだしながら、明日から出勤するつもりだといふことと、女房が職場で君を待つてゐる筈だから、すぐ歸るやうに傳へてくれといふことを、如何にもいひにくさうな口振でいつた。



翌日から出勤し始めた草加にはいそがしい仕事が続つてゐた。毎月きまつただけやらなければならぬ機関車の六ヶ月検査（六ヶ月目に行ふ定期検査、修繕作業）が、何日間か彼がゐなかつたために、だいぶ遅れてゐたのである。慣れた指揮者のゐない作業が、何やかにやと手間どることのやむを得ないのをよく承知してゐる筈なのに、一日中彼は叱言を並べながら、修繕線を歩き廻るのであつた。點檢用のハンマーも離したことがない。宙に浮いたままの機関車の煙突を覗いては、金網（しんま）の装置がわるいといひ、暗い火室の中へガスランプをかざしながらもぐり込んで、焰管（えんかん）の取付がなつてないと呷鳴つた。ひと通り出来てゐても同じであつた。技工たちに時計を突きつけてこんなにかかるのなら誰にでもやれるといふ。然し同じやうなことは今までにいちどもしなかつたし、それに技工たち自身も責を感じてゐるのであらう、別に反抗するやうなものもなかつ

た。

私はさうした彼の風貌から、てつきり彼が新しい探傷器の計畫に自信を失つてゐるにちがひない、といふことを見てとつた。でなければ、如何に仕事が遅れてもむやみに人を叱つたり、呷鳴りつけたりするやうな彼ではない。さうでないから數十人の部下からも信頼されてゐるのである。若し自信があるなら二百圓の資金も出来てゐるのだから、今までのやうに休憩時間が利用され、そろそろ準備にかからなければならぬ筈でもあらう。それをやらないところを見ると、やはりさうにちがひない、としか私には思へなくなるのであつた。

そこで或日私は、圖面をとるためにいつしよに車庫内を歩いてゐたが、あたりに人のゐないのをたしかめてから、

「その後、例の方はどうなりましたか？」とたづねてみたものである。

すると彼は驚いたやうに立ちどまり、私の顔を見てからすぐさま歩き出し、



「例の方つて探傷器？」

「ええ」

「あれにはまだ手がつかないんだよ」

調子の落ちた返事に想像通りだと思つた私は事務的にききかへした。

「どうかしたんですか？」

「……………」

「見込みがないんですか？」

一臺の機關車の車輪前に蹲んでから彼は答へた。

「そんなことはない、自信はちゃんと持つてゐる、然し君、君には話しくいけどまだ困ることもあるんだ」

「話して下さい、私もさうきいては引つ込んでゐられませんから」

相手は何度も首を振り下してゐたが、やがて幾らか重重しく、

「といつても、別にたいしたことでもないのだが、君に話しくいといふのは金のことさ、まだ少し足らんのだ、然しそれはほかからはいるあてもあるのでちぎに解決つくと思ふが、もうひとつのやつだよ、それだけは考へるとむしやくしやしてくる」

「何です？」

「試験器を壊した奴があるんだ」

「試験器を？」

「うむ」

彼はいまいましてに黙り込み、修繕線の方へ踵を轉じたが、それはまるでそこに群り働くものの中から犯人を見出さんとしてゐるかのやうな鋭い光に満ちてゐた。その試験器とはいふまでもなく彼の考案した「汽罐水壓試験器」のことだが、今では立派に實用化されて毎日の修繕作業になくはならない存在となつてゐるものである。それが彼の缺勤中に破壊されたといふのだから、さすがに私にもかへす言葉がなかつた。といふよ



りは、その事實を信ずることが出来なかつた。單に技術家（といへないやうな人の場合でも同じであらう）の常識を以てしても、それ自身が機械を破壊する行爲に出ることなど肯定出来ないし、ましてや彼等自身の日常の仕事に、たいへん役立つてゐる點に考へ及ぶならいつさうわからなくなつてくる。その前には、たとへば草加に私憤をいだいての腹癒せにちがひない、とするものがあつたにしろ、直ちに承服しきれないものが残る。問題は個個の間だけで解決すべき性質のものでないやうにも思はれる。私はさきに立つて修繕線の奥の置場所へ行つてみた。

壊れてゐるのは事實であつた。ゲージもパイプもべしやんこになつてゐる。これでは考へざるを得ないではないかと草加はすましながら呟いたが、破壊状況を凝と見まもつてゐるうちに、次第に私には故意にさうしたのではなくて何か落下する重いものの下敷にされたのではないか、といふ風に思はれてきた。さうなると私は一途に信じ込む方で草加にもいつてみた。すると草加も初めは容易に肯んじなかつたが、やがて何度も腰を

折つて調べなほしてから、殊によるとさうかも知れないといひだした。その表情が急に輝いて見られたのも事實である。

事務室へ取つてかへしながら私は、

「これだけは部下を信じていいですよ、あんたを困らせるつもりで壊すやうなものは、いまどき一人もゐやしませんよ」と笑ひながらいつた。

彼の顔はほぐれなかつた。

「俺も初めはさう考へたんだよ、然し君、實際にやむを得ない事故のために壊れたのなら、誰かいつてくるものがあつてもいいだらう、これこれのやうな始末だとか、こんな具合になつてゐたとか……」

「いつ氣がついたんです？」

「出勤した初めの日さ、連中、昔の手押ポンプを多勢で使つてゐるんだ、をかしいと思つて行つてみると……」



「それですぐきいてみなかつたんですね」

「うむ」

「私にでも話してくればよかつたのに……」

彼は答へなかつた。事務室の椅子に腰を下しても黙つてゐた。まだ心のどこかにひつかかるものがあるのだらう。それは私にもわかる。自然破壊だと主張した私の意見も、別に目撃した事実から出てゐるわけでもないし、その後の技工たちの申合せたやうな沈黙の性格を考へただけで、力ないものになつてくる。だから私はすぐに、一應技工たちを調べて見よう、とすすめる氣にもなれなかつた。私の觀察の誤が證明されるのはよいとして、實際に故意に破壊したものがあつてその犯人が現れない場合に立ち至つたとしたら、いつさう困るにちがひないといふ不安があつたからでもあらうか。私はいつか彼と、新しい機械が職場に及ぼす影響と、彼の立場とについて語り合つたことのあるのを思ひ出した。當時の彼の苦しみといふものが、やはりさうした事故の豫想の上にあつた

のも事實である。俺はずつと、幾ら機械が進歩しても、それで人間の生活が行きづまるなんて夢にも考へてゐなかつたのだが、一時的にしろ、さうでない場合があるといふことがわかつた、ともいつてゐる。それを言葉通りに信じ込んでゐたら、探傷器の考案も何もあつたものでもなからうが、現在の眼の前の試験器事件が、これからの仕事にどんな障礙にならないとも限らない。だから私は若し、調べるならば機關區長のところへ持ちだし、わかるまで徹底的にやる必要がある、と思つた。そしていい加減にやるのならやらない方がよい、と繰返しいつたものである。すると彼は意外さうに私の顔を凝視めてゐたが、やがて靜かに首を振つた。そんなことをしても仕方がないといふ。どうして仕方がないかとききかへすと、すつかりもうあきらめたといふ風に、今更罪人などだしても追つつかないから、と答へるのである。それならどうしたらよいかと詰めるやうにいつても、すでに彼は火の消えかかつたストーヴを、腰かけたまま抱くやうにして顔を伏せてしまつた。然し私は黙らなかつた。まだ方法は幾らでもあるといつた。たとへ



ば、もういちど水圧試験器を造つて監視することで、同じ悪戯に出る奴を取押へることも出来るし、又、分別深い技工を腹心にして犯人をさぐりだすことも可能である。何れでもあなたのよささうな手段を採らうではないかと附足した。それでも彼は口をひらかなかつた。只管に考へ込んでしまふのである。

さうしてどのくらゐ経つたであらうか。そろそろ私も机上のやりかけの製圖にかからなければならぬと思つてゐると、急に立ちあがつた彼が、性急に總入齒をかくがくさせながら、今日は俺は暇を貰つて歸る、といつて時計を見あげ、

「わがままいつて濟まんが、かうしてゐるとたまらなくなつてくるもんだから」とわざとらしい自嘲的な微笑を浮べるのであつた。

私も若干やりきれなくなり、

「お歸りになつてもかまひませんが、思ひきつていちど調べてみたらどうです、すぐにみんなを集めてもいいですよ」

「いや、よさう、俺が悪いんだ、俺にはひとを罪人として責める資格なんか無い、そんなものがあるとは思へない」

それには私もあつ氣にとられたが、

「さうでなく、氣輕には考へられませんかね」といつた。

然し彼はもうテーブルの上の制帽をつかんでゐた。

「本當にそれどころぢやない、思ひつめると俺はいやになつてくるんだよ、可笑しいだらう、可笑しかつたら笑つてくれ」

「別に可笑しいことはありませんよ」

「笑つてるぢやないか」

さういふ鋭い表情に私は驚いて否定した。

「笑つてやしません、可笑しくもないのに笑へる筈がありません」

「とにかく、今日は歸る、もう六檢の方も差支へないと思ふから……」



「それぢや私があとでよく調べて置きます」

扉のところぢよつと彼は振りかへつたが、別に拒む色も見せずによく出て行つた。制服の上の作業衣も脱がない、着ぶとりの猫脊が職場のベルトをわけるやうにして走るさまが、私には情ないほどいたたく眺められた。

技工長の代りに、終業の點呼を執ることになつた私は、少しく早目に技工たちを集めて済ませてから、試験器の問題を持ちだした。そして可成りにくどくどしく、不祥事件の性格を明らかにするつもりで時局を論じ、試験器そのものの存在意義やら、それを造りだすまでの草加の苦心やら、獨り息子まで戦死させながらなほ次の仕事にかかつてゐる草加の立場やら、何やかやと並べたものである。然し問題は思つたより簡単に解決して、かへつて私を狼狽させたくらんであつた。これまでの勤務振から考へて、文句なし

で信頼するに足る一人の年輩の技工が、あれは技工長が出て來なかつた日の作業中に、機關車のデッキの上に置いたジャッキが落ちて下敷にされたのだ、と最初の私の想像した通りのことをいふのである。自分も見てゐたといつて證明するものも何人か現れた。あんな便利なものを壊すなんて、よつほどの馬鹿者でもなければ、と暗に私を皮肉るものも出たくらんである。全員の空氣から推しても疑ふ餘地のないのに私も安心した。そこで私も更にあらたまり、それなら何故もつと早く、技工長が出勤したときに話さなかつたのかと質問した。すると暫くの間は、顔を見合せてぶつぶつといつてゐるものもあつたが、再びさつきの技工が代表して、さつそく報告しようと思つたのだが、初めから不機嫌な顔を見せられたものだから、ちよつといひそびれてゐるうちに技工長にも氣づかれてしまひ、話したものが變にとられやしないかなどといふ懸念もあつて、つひに機會を失つてしまつたのだと答へた。それなら俺に話せばよかつたのだと私は突つ込んだのだが、それには釋明するものも現れなかつた。變に鼻を鳴らしたもののあつた



のは、單に若輩の私の生意氣な言葉への反撥からだつたにちがひない。私はそんなことにかかはつてをれないほどのほのとした氣持で、草加の喜ぶ顔を思ひ浮べながら解散を命じた。

夕方からの風が空に鳴つてゐたが、私は食事を済ますとすぐ草加を訪ねるために下宿を出た。その頃から草加にたいする私の氣持は、單なる上役への義務感から生れるものではなくなり、もつと親しみ深く煩瑣を愛するやうなところもあつた。これは不思議だといへば不思議だが、恐らくは草加自身が私にあたへてくれたものにちがひない。見知らぬ女に千圓もの金を出したのはまあよいとして、それを通じての彼の言動や、襖に鍵まで用ひる生活振や、今度の試験器事件への態度などに、よい意味での稚氣を感じるのには私ばかりでなからう。特に試験器事件の發端が、僅かひと言彼が技工たちにたづねなかつた點にあるのを思ふとよけいである。自然に微笑ましくもなつてくる。親子ほど年齢もちがつてをりながら、それ以上だといつてもよい愛情が私には感じられるやうにな

つてゐた。

草加の家に近い路次で私は圖らずも機關士の藤井達郎に會つた。例の山邊要藏の話で大山みつ子に金をだした一人である。もつとハツキリいふと、職場内でもけちんぼで有名な、見るからに狡るさうな眼を持つた小柄な年寄である。いつもなら簡單に顎をしやくつて擦れちがふのだが、そのときは向ふから立ちどまり、いま草加を訪ねたが會へないので、これから君のところへ廻るつもりだつた、といつて私の返事も待たず、つづけて大山みつ子を訪ねた際のことをたづね、山邊にはきいたが全部信用することも出来ないので、と大きな聲でいつてのける。仕方なくかいつまんで話すと、やつぱり本當だつたかと大きな溜息を吐き、それでいつたいどうするつもりだといきまいてくる。私は期日までは黙つてゐるよりほかに仕方がなからうといつた。すると彼は不満さうに鼻を鳴らしてゐたが、かうなつては捨てても置けぬ、軍需景氣などいつ消えるかわからんのだから、是が非でも今のうちに取戻さうではないかといひ、さつそくほかのものにも相談



してみようと附足し、ろくな挨拶もしないで暗闇の中へ姿をかくした。私はそれを見送りながら、思はず面白くなりさうだと呟いたが、第三者の立場に立てない事情にあるのに氣づくとは急に頬がほてつてきた。

草加は留守のやうでもなかつた。外からの聲で私と知つた夫人が手を取らんばかりに茶の間へ案内する。いそいそしく火鉢の前の座布團を裏がへしてすすめたり、茶をいれる支度を始めたりする。その間にも私の瞳は、何回か壁のやうに冷く閉ざれてある襖に向けられた。例の南京錠が見えなかつたので、あらたまつて夫人にたづねてみると、晝間から閉ぢこもつたままだといふ返事だつたから、恐らく中から鍵をかけてあるのにながひがない。先日は濟まなかつたと小聲で繰り返す夫人には答へないで私はまた加減でもわるくなつたのではないかと襖の方へ顎をしやくつて見せた。すると夫人は如何にも申しわけなさうな面持で、仕事を始めるともう夢中になり、たとへ食事どきになつても、どのやうな大切なお客が見えても出て來ない。現に先刻も機關庫の方が見えて暫く

お待ちになつてをりましたが、いくらいつても駄目なものですから、怒つてお歸りになつてしまひました、と答へた。その先刻のお客といふのは、多分藤井達郎のことであらう。瞬間私の眼にはかへつて座を蹴つて立つたであらう姿が微笑ましく浮びあがつてゐた。別に意味あるわけでもないが、さうし、思ひ知らしてやつたがよいやうにさへ思へるのであつた。

夫人は何度も隣室へ聲をかけた。稍よ激しい調子で、私がきてゐることを告げるのである。然し返事はいちどもきかれなかつた。私はゐないのではないかと思つた。若し本當にゐるのなら、たとへばどんなに重要な仕事にかかつてゐるにしろ、襖越しにでもひと言ぐらゐの挨拶があつてもよささうなものだと考へられる。殊に私との關係で、その日の早退の理由が別のところにあつたのを思へば、いやいやながらも顔ぐらゐだすのが當り前かも知れない。そのやうに考へてくると、若干は私とて冷靜にしてゐられなくなるが、藤井達郎の場合を考へたときのやうな態度も次第に取戻すことが出來、かへつ



てそこに彼らしい性格の強さも感じられるやうになるのであつた。

やがて立ちあがらうとする夫人を制して私はいつた。

「今日は特別にそがしかつたんですから、ひよつとすると、もう休んでゐるのかも知れませんが」

然し夫人は襖の方へ顔をかしげるやうにしながら、

「休んでなぞゐるもんですか、こつこつ音がするぢやありませんか」と神経的な眉をひそめた。

私も息を呑んだ。すると夫人のいふやうに、微かな鈍い音が断續的に聞えてきた。少し早くなることもあつた。遅くなることもあつた。凝と耳をすますと何か呟いてゐるやうな聲まで聞えてくる。それは熱心に仕事をする場合の彼の癖で、職場の事務室で面倒な報告書など書いてゐるときなどにもよくきかれる。それだけでは、次の探傷器をどのやうに計畫し、どこから着手してゐるものやらわからなかつたが、私はただ仕事さへ始

めてくれればよいと思つた。同時に私はふと晝間彼がほかからはいることになつてはゐるが、金が足らなくて仕事にかかれないうつた言葉を思ひだし、それもうまく運んだに相違ないと思ひ、それとなく小聲で夫人にたづねてみた。夫人はあからめた顔を伏せて容易に答へなかつたが、やがて毎度お恥づかしい次第だかと断り、山邊の方はどうなつてゐるかとききかへしてきた。その瞳のおののきには、よけいなことだと草加に叱られさうな氣もしたが黙つてゐるわけにもいかず、草加に報告したと同じことを繰返したのである。そして最後に相手がどのやうな態度に出ても、元なしにすることはないから安心してゐてよいといふことを強調した。

夫人はその場にあるのも苦しげであつたが、

「實は、今月の俸給も渡してくれないものですから、お借りしたのもおかへし出来な

いでゐます、申しわけございません」ととききとれないほどの聲でいつた。



實であらうが、それが待てないで差當り夫人に渡さなければならぬ生活費を流用してゐるにちがひない。きつと喰べなくも生きていけると思つてゐるのでせう、と隣室へあてつけがましくいつて微笑む夫人の顔を見てゐるうちに、次第に私も同じ點に共鳴しないではゐられなくなつた。總べてが犠牲にされてゐるといふ感じであつた。そこで私もつひ夫人を慰めてやるだけのつもりで、もう少し考へてくれるやうに私からも話して見ませうといつたものである。

夫人は急に他人のことでもあるかのやうに笑ひながら、

「發明家なんてああいふものでせうか、さんざ人に迷惑をかけて置きながら何とも思つてないので、思つてるかも知れませんが、さう見えませんものね、いくら迷惑をかけても、何かひとつ機械を考案すれば、それでみな零になるといつたやうですわ」といつた。

私も同感の意を相槌に托して隣室を窺つた。

「そんなこともないでせうが、とにかく仕事の仕事ですから、脇から見てるやうなわけにはいきませんよ」

「でも、家は特別です」

「ほかにやつてるやうな人はないぢやありませんか」

私は立ちあがつた。氣の毒さうに夫人は又もや隣室へ聲をかけながら止めるのだが、私は簡単に用件を話し、明日から出勤してくれるやうにと傳言を依頼した。然し實際は半ばあきらめながらも、今に襖があいて草加の顔が現れやしないかと氣を配つてゐたのだが、その豫想もつひに裏切られてしまつた。

「あとでよく申して置きますから……」と玄關に両手をついた夫人ともういちど笑ひ合つて私は外へ出た。



翌朝、いつもより早目に出勤してみると、草加はすでに事務室のテーブルの上に圖面をひろげてゐた。故意に靴音を立ててはひつて行くと、ちよつと猜疑深い視線を寄越してから、いそいで折目のままに疊み込んでしまふのである。瞬間にも私はそれが機關車機械部分の製圖でないのを見てとつた。鉛筆びきの簡單なものだが新しい探傷器の計畫圖にちがひない。私は朝の挨拶も忘れていよいよ出来あがつたのかと喜んだのだが、彼は苦苦しい微笑を浮かべながら首肯いただけで、すぐさまその圖面を抽斗へ入れて鍵をかけた。それには私もあきれた。

水壓試験器について話しても同じであつた。ただひと言申譯のやうに、それはよかつたといつたきり、おきまりの長い點檢用のハンマーを持つて修繕線へ出て行つた。別に嬉しさうでもなく當然だといはぬばかりである。私にうちあけたときの苦惱に満ちた心情などもはや想像も出来ないくらゐであつた。そのとき若し私が、前日の言に反して彼が出動してゐる事實のうち、彼の本當の内心を見ることに氣づかなかつたならば、以

後いつさいから手をひくことを決意したにちがひない。二ヶ年餘の職場生活に曾てなかつたことであつた。

午後になると六檢組の一人の技工がやつてきた。そして至急に水壓試験器を使へるやうにして貰ひたい、といふ。毎日、手押ポンプではかなはない、といふのである。私はもつともな話だと思つたが、すでに草加も承知してゐる筈だから、誰か仕事の合間を見て修理したらよからう、といつた。するとその技工は、破壊の程度がひどいので一人や二人の片手間では到底出来さうもないといひ、そのために人を使ふにしてもぢかに技工長には頼みにくいからお願ひするといふ。どれほどの人手があればよいかとたづねると、全然新規に造るも同じだから、三人で五日や六日はかかるだらうと答へた。それくらゐは何とかなりさうにも私には思へたので、話してみようといふことで使ひのものを歸した。終業のホキッスルが間もなく鳴る頃である。油まみれの姿で草加が修繕線から引きあげてきたとき、恰度私は翌日の作業交番をつくつてゐたのでさつそく持ちだした。ここ



で三人や四人の人手をかけても、毎日手押ポンプでやることを考へれば、すぐに取りかへしのつくことだから、是非都合してやつて貰ひたいとも附加へた。然し草加は暫くの間、薄い唇を一文字に結んだまま交番表に見入つてゐたが、やがて獨り合點に首肯き、今のところ六検が遅れてるからあとにしよう、といつた。小修理組の方からだせないかとたづねても同じであつた。現場に携つてゐない私には、いちいち仕事のやりくりにまで嘴をいれることも出来ないで、それなら少し延ばさうといふ以外に仕方がなかつた。

朝ほどではなかつたがやはり草加は不機嫌さうであつた。それは疲勞からでもあらう。頬骨のつき出てゐるのがよけいに目立ち、テーブルの上を片づけ始めた両手があやしげな動きを見せ、いらいらしげな態度に話しかけることも出来ない。

それでもいつしよに歸り支度をしながら、  
「連中も今になつて、やうやくありがたみがわかつてきましたよ」

さういふ私にひよいと顔を向けて寄越した。何のことやらわからなかつたらしいので、水圧試験器のことだと説明すると、若干はにかむやうに笑つて見せた。

「本當に仕方のない奴等だ、考へると癢に觸るから考へないことにしてらんだよ」  
そこで私も、

「然し草加さん、すぐさういつてくるところがいいぢやありませんか、連中の氣持もわかります、困つてゐることは事實ですよ」

「困つてもかまはん、當分困らせてやつた方がいいと思ふんだが」

「さうですかね」

「でないとわからん、ジャッキが落ちて壊れました、これで済むと思つてゐるんだからね」

私は相手の顔を見た。そしてあらためてジャッキの落下による破壊であることを説明しなほした。故意の仕事でないといふことも強調した。そんなことをする技工など一人



もみないといふことも、繰返さないではゐられなかつた。然し私は單に彼の誤解をとかうとしたのでもなければ、技工を辯護するつもりばかりからでもなく、何か私は悲痛な氣持にされてゐたのにちがひない。さうした私に度膽をぬかれたのであらうか、最後まで草加は黙つてきいてゐた。それでも、私が、悪意を持つものはすでに一人もないといつてよいのだから、明日にでも修理してやつて貰ひたいといふと、ひと言考へて見ようと呟き、作業衣のまま出て行つてしまつた。

その後も技工は度度話を持つてきた。いつも草加のみないときを見はからつてくるのである。或時は水壓試験を受持つ全員が、それがなければもう仕事をしないとまでいつて歸つたことさへある。かと思ふとすぐにおだやかな代表者を寄越し、場合によつては居残りでもよいから、材料だけでも工面してくれるやうにとまでいふのであつた。それには私も參つて草加に傳へるのだが、いつかうに取合つてくれさうもなく、いつもきき置く程度である。うつちやつて置いたら、どんなことになるかわからないと驚

かしても、別に變つた様子も見せない。昔はなくてやつてゐたのだから、やれないこともあるまいと、ひとり私にはかりでなく、技工たちのゐるところでも冷然と嘯く始末である。さうした横顔を脇から見てゐると、さすがに私にもにくしく思へてならなかつた。勝手にしろと叫び、以來いい加減の仕事に日を送り出した技工のゐるのも事實であつた。

さうなると私も捨てては置けない。草加の意に反しても使はせなければならぬ。と思へばこつそり修理してしまはうといふ技工もあつて、つひに私もその氣になつてきたのである。都合のよいことには三日に一日は必ず彼は修繕機關車の試運転で本線へ出て行く。その留守中をねらふことにした。出来あがつてしまへばこつちのもので、如何な草加も我を折るにちがひない。そこで私もさつそく事務の材料係に交渉し、必要の鐵材やらゲージ類やらを準備して貰ひ、何人かの技工を選んで草加の出張を待つては仕事に取りかかつてゐた。草加を乗せた機關車が、驛の構内へ出て行くとそれつといふ懸け聲



である。自分ながら可笑しくなる。然し実際に損品を分解してみると、容易だと思つてゐた機械の甚だ複雑なのがわかつてきた。こまかい部分でわからないところが澤山出てくるのである。専門の使用者にたづねても首をかしげてばかりゐる。それに腹を立て、よく今まで使つて來られたものと皮肉に出るものもあつたが、そのものにもわからないのだから話にならない。私は曾て私の製圖で青寫眞をつくつたことのあるのを思ひだし、さつそく事務室の圖面箱や戸棚をさがしてみた。なかなか見つからなかつた。特に草加が大事なものをいれて置く書類箱を見てもない。同じ箱からは、例の「草加式ユニオンレンチ」や、「連結棒缸削正器」などの圖面だけが何枚も現れた。そして半月を無益に過した私は、ふと草加に疑ひの念をいだき、さうなるともうさがす氣力もなくなつてゐた。かうしたこともあるかと豫想して、何れかに隠したにちがひない。いや隠したのだと、單なる疑念の程度で済まされなくなつてもくるのであつた。不愉快な目にはされつづけで食傷氣味のせゐもあらう、私にはも早怒ることも出来なかつた。

然し私はその日、草加を試運轉機關車の下まで出迎へ、歩きながら留守中の業務を報告してから、

「少し勉強したいのですが、試験器の圖面を貸して貰へないでせうか」と要求した。

草加はチラと私を見てからいつた。

「貸せないつてこともないが、俺もいま使つてゐるもんだから」

「ちよつとあかないでせうか？」

「當分は駄目だね」

「また改良でもしようといふんですか？」

「いや」

「ひと目見せて貰ふだけでいいんですけど……」

「家に持つてつてあるんだよ」

冷やかにいひ放つた彼は語調を和けて、さう心配してやらん方が連中のためになるん



だよ、とつづけていつた。私は答へなかつた。彼のその「連中のためになる」といふのが、私の考へてゐる以上のものを含むかどうか気がなつたからでもあり、結局は類のない意地の悪さにあきれて二の句がつづかなかつたからでもあつた。

薄暗い車庫の中はいつてから、

「私には草加さんの氣持がわかりませんね、折角の誠驗器も、使はせなかつたら何にもならんでせう、技工たちからすれば、ないのと同じぢやありませんか、といふより或場合には有害ですよ、現にもうさうなつてゐると思ふんです、あんたにはさう見えませんかね」といつた。

草加は肩をそびやかせながらさきに出た。

「見えないこともないね」

「ぢや、造らしてやつてもいいでせう」

「いや、それとこれとはちがふよ」

「どちらがひます？」

「どうもかうもない、俺にはやる氣になれないんだ」

「さういふものですかね、私には賛成出来ませんよ、若しそれでよいものなら、今の探傷器なども造る必要がなくなる、といふことになるでせう、さうぢやありませんか、問題は問題とし、とにかく出来たものは實用に供するのが當然でせう、すでに完成したものは、決してあんた一人のものではないと思ふんですがね」

すると草加は立ちどまつて額に皺を寄せたが、まるで駄駄つ子のやうに、

「そんなことはない、そんなことはない、そんなことがあつてたまるものか」と叫び、走るやうに事務室の方へ行つてしまつた。

やむなく私もあとについた。



## 第五章

事務室でも繰返して、結局は喧嘩別れのかたちで帰宅した私とその夜眠れさうもないままに草加を訪ね、もういちど話し合つてみようかと考へてゐると、意外にも彼が見えた旨を女中が傳へてきた。私は彼もやはりさうだつたかと思ひあたることよりさきに、彼が訪ねてきたといふ事實の方に、少からざる狼狽を感じて立ちあがつてゐた。それは私が、彼のもとにあつたそれまでの間に、いぢどもないことだつたからである。

すでに夜も更けてゐるといふのに、まだ制服のままの草加は、玄關で顔を合はせたとさきからわざとらしい微笑まで浮べ、ときには私におもねるやうな態度さへつくり、坐る場所もないほど新聞や雑誌などでちらかつてゐる部屋にはいつても、別に驚いた様子も見

せず、なかなかよいところだなといふ。勝手にするがいい、勝手にしますで職場をきりあげてきたのだと思ふと、さすがに薄氣味わるい感じでもあつた。然し私は火鉢の前に坐り込む彼を待ち、

「何か急用でも？」と氣輕にたづねた。

「いや」と彼はあわてて、「急用といふほどでもないが……」とあとを濁らせ、例の猜疑深い腫になる。

いひにくさうである。それは水壓試験器に關してゐないのは明らかだが、少しもそのことを氣にかけてゐさうでないのがわかつてくると、私は期待を裏切られたやうな氣持にさせられた。出かけて見ようとまで思つた自分が愚かしくさへなつてくる。

「女房が來なかつたかしら？」と彼はいつた。

それが如何にも思ひきつたといふ風なので、私もつい彼といつしよに室内を見廻し、然しすぐに可笑しくなつて、



「見えることにでもなつてゐたんですか？」とききかへした。  
すると彼は、

「それでも殊によると、と思つたものだから……來なければ來なくもいいんだけど……」  
「どうしたんです？」

「いや、ちよつとね、どこへ行つたかわからなくなつてしまつたんだよ」  
「奥さんが？」

思はず私も叫んだが、それに相手は不愉快さうな相槌をうつただけで顔を伏せ、暫く  
何かにきき耳をたててゐるやうであつたが、やがて、また顔をあげた。

「こんなことは君に話すのも恥づかしいけど、さうもいつてられない問題が起きちまつ  
てね」といひながら、上衣の内ポケットから一通の手紙を取出し、差出人の名を見せる  
のである。

私はいつかの大山みつ子の手紙を見せられたときの彼を思ひ浮べ、漠然と豫想される

新しい仕事、同じやうな方法で切り出されるしぐさに、微笑ましいものを感じながら  
見入つた。

「高橋中尉」と私は差出人の名を呼んだ。

彼はせかせかしくいつた。

「十郎の原隊にゐる知合ひの將校さんだよ、読んでみてくれ給へ」  
然し私もすでに思ひあたつたので、

「遺骨でせう？」と相手の顔色を窺つた。相手の眼眸は震へた。

「俺にはわからない……何もかもいつしよで……」

「いつ頃つくんです？」

「月末だよ、それも船の都合で、變更になるかも知れない、とはいつてるけど、たいて  
いさうなるだらう、困つたよ——」

私は、



「困ることはないでせう！」と叫んだものである。すると彼も、珍しく従順に首肯してゐたが、

「俺の氣持だけの問題だから、さういはれてしまへばそれまでだが……」といった。

「倅に濟まない、いや、倅ぢやない遺骨にたいしてだよ、俺はどんな顔して遺骨を迎へたらいいのかわからない……」

それは考へちがひだと叱りつけるやうにいつてから私はつづけた。

「遺骨は遺骨として迎へ、仕事は仕事としてすすめたらいいでせう、でなければ、私は到底、何も出来やしないと思ふんです、だいいち體がたまらないぢやありませんか」

「それはよくわかつてゐるつもりだが、やつぱり駄目なんだよ、手紙を見てしまつたらもう仕事なぞ手につかない、頭がぼろつとひろがつて行くやうな感じで……」

「それなら止めて置いたらいいでせう、ひと月やふた月のところを争つたところで、別に差支へない仕事なんですから」

「さうかな、俺にはさうも思へんが、さう思ふともつとつらくなつてくる、それが君にはわからないんだよ……いや、やつぱり俺は、憑かれてゐるんだね」

自嘲するでもない微笑が、骨張つた頬を掠め去つたかと思ふと、急に彼は苦しげに咳込んだ。片掌を口もとにあて、俯向くやうにしてゐるそのさまに、私は不思議に弱弱しい若さを感じ、不安とも喜びともつかない氣持に襲はれてゐた。同時にまたそれが、今日までの彼を生かし、幾つかの仕事を完成させたのだといふ風にも思はれ、例の試験器の問題で示した態度もそのやうな彼にだけは許せさうにも考へられてくるのであつた。私はそのとき彼の意見は意見とし、試験器だけはこつそり造りあげてしまふべきだといふことに、新たな決意を抱いたものであつた。

夜更けて冷える室内に氣づき、消え入りさうな火鉢に私が炭をつぎ始めると、草加も自然にあらたまる態度を押しかくすやうに煙草を取出してから、それで頼みといふのはほかでもないが、と斷り、俄にさらけだすやうな勢ひで喋り始めるのであつた。それは



四、五日前から女房がゐなくなり、今もつてどこにゐるかわからないといふこと、けれども遺骨がつくとつては捨てても置けないといふこと、ついでには自分で出向くのも變だから、出来たら私にさがして貰へないだらうかといふこと、等である。それには私も返事が出来ないまま、話の中途から煙草ばかり吹かしてゐると、馬鹿馬鹿しい話だよと取つてつけたやうに呟き、どうだらうかと迫つてくる。

「それで何ですね、今その奥さんがどこにいらつしやるか、見當もつかないといふんですか」と私は煙草の火を消してたづねた。

「さうだね」と相手は若干どぎまぎした態である。

何れかといへば、かへつて私の方が氣がひける感じで、それは一、二度訪ねて知つた草加夫婦の家庭生活から考へれば、別に驚くにあたらない事件かも知れない。探傷器の考案に、ただ祕密主義をとつてゐる彼を思ひ合せるまでもなく、好感の持たれるものであつた。それにまた、事件はいはば單なる夫婦喧嘩だと想像されるし、たとへ中に

はいるものが必要だとしても、ただちに私のやうな獨身者を選ばなければならぬ、彼の氣持も容易でなからうと思はれ、次第に私も眞剣にならないわけにいかなくなつた。

私はやがて草加の想像される夫人の居所を重ねて訊ねた。すると今度は草加も素直に二、三の心あたりの家を舉げて何れかにゐるにちがひないといつたが、更にその心あたりの家と彼との關係を質してみると私には納得出来なかつた。何故なら心あたりの家といふのは、別に彼と親しい間柄にもなつてゐるわけでもない、これまでの職場で働いたことのある友人に過ぎない。そこで私はあらためて、夫人の實家をたづねてみた。からした場合の女の足といふものは、その年齢を問はず自然に實家に向けられるにあらがひない、と思つたからである。

ところが草加は靜かに笑つて答へた。

「あれにはもう實家なんてありやしないよ、親もなければ兄弟もなく、俺と同じやうに天涯孤獨さ」



「みんな亡くなられたんですね」

さういつて私が話に勿體をつけがちの相手を責めるやうに見ると、途端に相手の瞳も反省的に光った。

「震災で行方不明になつたままさ、あれの實家は淺草で、ちよつとした小間物屋だつたが、焼かれてしまつたんだね、もう二十年にもなるんだから、この世にないと見なければならぬだらう」

「で、あなたの實家も同じ目にあはされたわけですか」

「さう、本所にゐたんだよ、両親だけだつたけど、だいぶ年齢もとつてゐたし、多分なんだね、被服廠へはいつたにちがひない……當時、安房北條にゐた俺たちだけが助かつたわけさ」

「ほかに奥さんが行きさうなところはありますか」と私はいつた。

草加は不機嫌さうに首をかたむけてゐたが、

「ないね」

「奥さんの昔からのお友達のひとつでもをりませんか」

「さあ——」

「それちやさがしやうありませんね、夜ですか、出て行かれたのは？」

「さう」

「乗車證は？」

「持つてない」

然し彼は突然子供のやうに瞳を輝かせて、あるあるあると繰返し叫び、最近は何日蓮宗に凝つて大變だつたが、何でもお寺で知り合つたといふ人に、戦死者の未亡人があつてその方と非常に親しくしてゐたやうだ、といふのである。その未亡人の家はとたづねると、すつかり彼も乗氣になり、寺へ行けばわかるに相違ないとやうやく安心した面持でもあつた。それには私も思はず、



「正直ですね、顔色が變つてきましたよ」と笑つた。

けれども草加はいつさう眞剣に、

「どうだね、そこへ行つてくれるかね、是非行つて貰ひたいと思ふんだが……」

「そりや行きますよ」

「行つて、話してみてくれ給へ、適當に」

「といふと？」

「いや、本當のところでもいい、そして連れ戻つて貰ひたいんだ、お願ひする、このままちや世間態もよくないし……」

私は、

「若し奥さんがいやだと仰言つたらどうします」

「そんな馬鹿なことはない」といつた。

「さうぢやないかね君、萬一、ぐづぐづいつて承知しなかつたら、承知しなくともかま

はないから引きすつてきてくれ給へ、あとの始末は俺がするから」

返事の出来ない感じだが、それは相手が眞剣になればなるほど他愛なくなり、同時に問題の解決も案外かも知れない、といふやうにも思はれてきた。けれども私が、更にさつそく翌日にでも訪ねて出来るだけのことはしてみるといふと、草加はすでに解決したといはんばかりの態度で、このところ全く君のおかげで生きてゐるやうなものだといひ仄かな血色さへ浮べて見せるのであつた。

そしてやがて、彼は、家に誰もゐないので心配だ、といつて立ちあがつた。それには私も笑つたが、背後から外套をかけてやりながら玄關まで送りだした私は、ふと例の試験器のことを思ひだし、このやうなときになら承諾するかも知れないと思ひ、それとなく話を持ちだしてみた。青寫眞が欲しかつたのである。

「あ、忘れてゐたよ」

さういひながら彼は、さつきの手紙のはいつてゐたポケットから、分厚くたたみ込ん



であつた青寫眞をひろげだし、これもよろしく頼まう、といつた。  
その顔はまつ赤だつた。

それから三日間といふもの、夕方から私は毎日夫人をたづね廻つたのだが、つひにさがしだすことが出来なかつた。草加があると斷言した戦死者の未亡人の家へも、お寺できいて行つてみたのだが無駄だつたし、その他の心あたりも同じであつた。もう長いこと影も見せないといふのが多く、四日目にははや行くべきところもなくなり、やむなく彼にも警察に頼んだらどうかとすすめた。滅多に間違ひのない年輩になつてゐるとはいへ金も持たずに出て行つたことを思ふと、自然に世に多い事故に思ひあたるのである。然しそれを言下に否定した草加は、この非常時に警察の厄介にまでなりたくないといふ。それでも私が、何といつても女のことだからと思ひきつたところをいひのけると、さす

がに彼も當惑の色を見せたが、すぐさま口さきをとがらせて、そんなことの出来る女なら、今からでも見なほせるのだがといひ、如何にもわざとらしく笑つて見せるのであつた。然し私には、さうした彼がかへつて痛痛しく感じられるだけで、どうして夫人がそんなことの出来ない女なのか、理解することが出来なかつた。職場で會つたときの夫人、私が訪ねたときの夫人、その二度の印象からのみ私が考へ過ぎるからであらうか。私には次第に不安のみが大きくなり、あやしげな夫人の姿まで眼のあたりに迫つてくる感じであつた。

四日目の夕方、もうどうなつてもかまはんから捨てて置かうと、すつかり不貞腐れてしまつた態の草加に、更に私はまだたづねるところはないかと相談を持ちかけ、勇氣づけるつもりでいつた。

「かうなつたら私も意地ですから、どこへでも出かけますよ、十日や半月、休暇を貰つてもいいと思ふんです、遠慮なく仰言つて下さい」



「それは本當に済まないけど……」と草加は口ごもつた。

私はつづけて、

「遠縁になつてゐる方でもありませんか？」

「さうだね」

「草加さんの方でも……奥さんの方でも……」

「あるかも知れないが、俺にはもうよくわからんよ」

「奥さんだつて間もなく遺骨のつくのがわかつてゐるんですから、何か仰言つて行きさうなもんですね、ハツキリしなくともそれとなく……思ひだせませんか」

「思ひだせない」

どうにも糸口のつかみやうがないままに、やはり警察の世話にでもなるより方法がないと思つた私は、その夜の搜索を断念してしまつたが、翌朝いつもの時間に出勤してみると、すでに作業衣姿の草加が事務室で待つてゐて、いろいろ心配かけて済まなかつた

が、昨夜歸つてきたから安心してくれと、いふのであつた。その浮き浮きした態度が如何にも若若しく、かへつて私の方が面映い感じであつたが、いつたどこにかくれてゐたのかとたづねると、静岡の親戚の家へ行つてゐたらしい、と平然たるところを見せてる。そこで私も思はず、そんなところに親戚があつたのかと突込んだが、草加の辯解には、ただ首肯くより他に仕方がなかつた。自分もいはれてやうやく思ひだしたくらの女房の親戚で、いちども會つたことがないといふのである。問題が問題でもあり、それにうまくもと通りにもなつた様子なので、それ以上責める必要もないと思つた私は、最後に草加から、君からもいちどよくいひきかせてやつて貰ひたい、といはれながらも軽く受け流してしまつたものである。

草加夫人は、それから間もないある夜のこと、私の下宿にやつてきた。草加に行けといはれたためなのか、自分でその氣になつたのか知らないが、ひどく玄關でも尻込んでしまひ、容易に通らうともしない。ちよつとお禮にあがつただけだからといひ、すぐに



でも歸りたいやうな様子だったので、私も買物があるからといっていつしよに出ることにした。風の出てきた暗い路地を、私は夫人を送るつもりで草加の家の方へとつたが、實は草加が街の電氣器具屋で待つてゐるからと夫人にいはれ、私も會ひたくなつて方向を轉じた。といふのは探傷器に必要な電氣器具を買ひに行つたにちがひないといふ興味もあつたし、事件の直後に街で夫人を待合はせる草加がどんな顔をしてゐるのか見てやらう、といふ若干の意地わるい氣持も手傳つてゐた。

私は黙つて歩いてゐた。どうでもよい世間話など私には向かないし、話したいことを話せば、みな夫人を責める結果になつてしまひさうに思はれた。夫人は暫くは氣まづさうに俯向き勝に歩いてゐたが、さうした空氣にも堪へられなかつたのであらう、やがて自ら追ひ拂ふやうな幾らか氣色ばんだ口振で、本當に今度は飛んでもない迷惑をかけてお詫びのしやうもないといひ、草加にもあきれてしまひました、といつた。返事に困つてゐるといつさう語調を高めて、私が家出したといつてたさうですね、と私の顔を窺ひ

ながら笑つた。それには私も誘ひ込まれて笑つたが、氣づくとかへつて反撥が残る感じで、草加夫人と話す場合によくあるやつだと思つた。

夫人はなほも笑つてゐた。

「よい年齢としをして夫婦喧嘩だなんて、よく若い方に申しあげられたと思ひます、草加といふ人間はそんなことが平氣でいへるんですからびつくりしてしまひます……實は何ですの、ご承知のやうに、あまり暮し方を考へてくれないものですから、少しいつてやつたんでございます、それを取りちがへたのに相違ありませんが、どうぞ氣をわるくしないで下さいまし……」

「静岡は何ですか？」と私はたづねた。

つい唇に上つた言葉ではあつたが、夫人には相當手ひどくひびいたらしく、ちよつと返事にも困つたやうだが、

「……たつた一人の、私の従妹が嫁いだ家があるもんですから、行つても仕方がないの



ですけど、いざとなるとやつぱり頼りにしてしまひまして……」

「草加さんはご存じなかつたんですね」

「そんなことはない筈ですけど……」

「知らないやうでしたよ」

「忘れん坊ですから」と夫人はいつた。

私は自然に冷やかになる自分を意識してゐた。

「それでも奥さん、草加さんもずいぶん心配されてをりましたよ、この數日間にすっかり人が變つた感じですね」

「さうでせうかしら」

夫人は微かに呟いて黙つた。街へ通ずる踏切のところでは立ちどまつた。驛を出たばかりの機關車の放出蒸氣の音が、次第に激しく傳つてくる。私たちは黒黒と通り過ぎた貨物列車の赤い尾燈を見送つてから歩きだした。

そろそろ街にかかつてゐたが、寒さのために人通りも少く、店頭の花も消されてあるのが多かつた。電氣器具屋まではまだ數町もあらうか、夫人が突然にうつて變つた態度で、申しあげてよいかどうかわからないかと斷り、

「遺骨をむかへましたら私、何とか考へなければならぬと思つてをりますが……」といつた。

私は脊筋に水でも通された感じで夫人を見た。

夫人はつづける。

「やつぱり申しあげてしまひます、今更、とお思ひになるかも知りませんが、今になつて私は、やうやく自分がわかつたやうな氣がするんです……自分といふのは、その草加にたいしての自分です、自分といふものが草加にとつて何かといふことがわかつてきたのです、それで、到底このままではゐられなくなつた氣持です、どうしたらよいかわからなくなつてしまひました、いいえ、わかつてきたからつらくなくなつたんだと思つてゐま



す……草加にはいへないことですけど……」

「それは奥さん、奥さんの思ひ過ぎぢやないでせうか」と私は初めて夫人の呼吸に觸れた思ひでいつた。

「さつきも申しあげたやうに、草加さんは奥さんがゐなかつたら、何も出来やしませんよ、草加さん自身もよくわかつてきたんぢやないでせうか、ですからあんなに奥さんのことを心配して騒いだんです、騒ぐといふと語弊がありますが、心配してゐたんですよ」  
夫人は足もとを拾ふやうにゆつくり歩きながら、

「私は草加といつしよにゐると、草加を不幸にしてゐるとしか思へなくなつてくるんです、十郎があんなことになつてからはよけいに……」

「さうぢやない、探傷器にかかつてからでせう」

「さうかも知れませんが、どつちも同じ頃でしたから」

「草加さんは探傷器で頭がいつばいなんですよ、それで何も出来なくなつてしまふんで

せう……廻りにゐるものの不満も……」と私も口を噤んだ。

近くの角を曲つた自動車の前照燈が正面に迫り、一瞬夫人は驚いてかたはらへ避けたが、過ぎると再び私に寄り添ふやうにして始めた話し振には、少しも前に變るところがなかつた。

「一時は私も不満に思ひましたが、それはずつと昔のことです……今は不満などといふより、不安でなりません、ゐたままらないやうな不安です」

「將來の生活にたいしてですか？」

「それもあります、草加の仕事にも感じられますし、私自身にも感じられるんです……それがもう、がまん出来なくなつてまゐりました」

「然し……」夫人は私の言葉を奪つてつづけた。

「私が離れてさへゐれば、そのやうな不安もなくなるし、草加の仕事も早く完成するんぢやないかと思ひます、あなたはあのやうな草加の生活振をご覽になつて、どのやうに



お考へになつてゐるか存じませんが、私にはさうする以外に道はないやうな気がするんです」

「それでどうなさらうと仰言るんですか」

「静岡へまゐらうと思ひます」

「草加さんが承知しないでせう」

「さうでせうか」と夫人の聲はいつさう冷やかにひびいた。

私は黙つた。そして實際に夫人の手にある、それだけに人のよい草加を、妙に哀れな姿で思ひ描いた。複雑な夫人の氣持をはかり知ることにもつとめず、ただ歸つてきたといふ事實の前にだけ、彼の解決があつたのは明らかだ。それは彼の弱點とも言へるであらうが、同時に私は夫人の思ひつめた決意の冷酷さがわかるやうな氣がした。草加の不幸を招いてはならないとか、ずつと邪魔者であつたのだとか、別れることで總べての不安がなくなるであらうとか、さういつたこと自體が、如何なる經驗から割りだされてゐるにしろ、私には賛成出来ないものであつた。

電氣器具屋のある通りへ出ると真正面からの風が刺さるやうに冷たかつた。何か夫人がいつたやうだが私にはききとれなかつた。ただ兩掌で襟卷の端を持つて口のあたりを覆つたさまが、奇妙に娘のやうな感じをあたへ、よけいに私の唇をかたくさせた。

店の手前で夫人は立ちどまつた。

「つまらないことを申しあげてしまひましたが……」と間を置いてから、

「濟みませんが草加には仰言らないで下さいまし、いつもあとで後悔するんですけど、打ちあける方がないのですから、つい失禮だと思ひながらも……」といつた。

ふと私も曖昧にときが來なければ駄目だと思ひ、自然に出るおつかぶせるやうな調子で、

「奥さんのお言葉の通りにしますよ、その代り何ですわ、ひとつ、約束して貰ひたいことがあるんですが」



「何でせう？」と夫人は私の顔を見た。

「どのやうなことになるにしても、事前に私に話す、といふ約束です、といふとひどく生意氣に聞えるかも知れませんが、決してそんなつもりぢやありませんから……」

「ええ、そりやもう、よくわかつてをります」

さういつて夫人は必ずさう致します、と呟いた。

明るい電気器具屋の奥で、主人らしい男と草加は高い聲で話してゐた。相變らずの制服姿である。襟巻をとりながらはいつて行つた夫人から、私のゐるのをきいたのであらう、すぐさま椅子からそりかへるやうにして視線を寄越したが、見えなかつたやうである。妙な顔であつた。それは思ひがけないものをむかへたといふだけの現れではなくて、どこか警戒心から發してゐる感が深く、やはり草加らしいと思へないでもなかつた

ので、私は節窓の前に身を避け、欲しくもない電気用品に見入りながら、時折中の様子を窺つてゐた。

中では値段が問題らしい。高いとか安いとかいふ聲がきかれる。どのやうな品物か見えないが、いちど草加の手で風呂敷包にされたのが、すぐにまたほどかれたりしてゐる。この前買つたのと少しもちがつてゐないのに、倍近いなんてないだらうといふ草加の怒つたやうな聲がしたかと思ふと、もの慣れた態度で笑つた主人が、時代が時代だからやむを得ないと應酬する。買つて貰はなくもよいといはぬばかりであるのが遠くからでもわかる。

二十分もかかつたであらう。やうやく話もまとまつたらしく草加も立ちあがつた。そしてなほもぶつぶつ呟きながら風呂敷包を下げて夫人といつしよに出てくる。そのとき持たうと差しだされた夫人の手が、その風呂敷包で軽く拂はれたやうだが、瞬間の夫人のゆがんだ顔が、私の瞳に残つた。



「たいへんですね」と私も飾窓から離れて行つた。

「いや、お待遠う、寒かつたらう」と草加は愛想のよい笑顔を見せたが、激しい風の中だつたからでもあらう。ひどく痩せ細つた感じであつた。然し彼は、入用のものは揃つたかといふ、私の質問には答へないで、何もかも高くて品がわるいといひ、ちよつとかたはらの夫人を見かへすやうにしてから、その邊でお茶でも飲んで行かうかといつた。素直にあたりを見廻した夫人が、もうどこもやつてゐないでせうといつたときには、すでに彼は歩きだしてゐた。

あとにつきながら笑つた夫人が、

「ご迷惑ぢやありません？」と私にいつた。

私は首を振つた。

「こんなことは度度あるんですか」

「こんなことと申しますと？」

「ごいつしよに喫茶店をさがすやうなことですよ」

「飛んでもない」と夫人は朗かさうに否定した。

「喫茶どころかいつしよに歩いたこともありません、結婚して初めてですよ」

そこで私も草加に聞えるやうに、

「さうですかね、夫婦生活つてさういふものですかね」といつた。

すると草加もちよつと振りかへつたが、別に何ともいはずに十字路の角にある、小さな喫茶店へはいつて行つた。下げてゐる風呂敷包が、無恰好で大きかつたせゐでもあらうが、やはり私にはさうした彼の姿が少しも似つかはしいものには思へなかつた。いやいやながらの夫人の場合も同じであつた。

ほかに客のない部屋の片隅に席を取り、草加と私が向ひ合つて腰を下すと、夫人は瞬間どつちかはにしたものかと迷つたやうだが、草加に指されるままにかたはらに坐り、眞正面に私を見るのがつらさうに顔を伏せてゐた。



愛想のない女の子が註文をききに出てくると、草加は面倒くささうにメニューをひつくりかへしてからコーヒをいつた。そして忘れてゐたといふやうな態度でバットを取出し、私にもすすめてから火を點けてつづけざまに吸ひ始めた。話題のない何分かである。私はふとさうして草加夫婦と同時に顔を合せるのが初めてなのに氣づき、妙な好奇心の湧くままに、なるべく二人を見ないやうにしながら黙つてゐた。

それが草加にはだいぶつらかつたと見え、バットも口もとまで吸ひつくすと、足もとに捨てて靴で踏みにちり、夫人の方へ顎をしゃくつたりして、いらいらしく不機嫌なところを見せた。それでもコーヒが運ばれると、やうやく満足さうにひと口飲み、寒いときにはあついものに限ると呟き、わざとらしく舌を鳴らしては、しきりと私の方に氣をくばつてゐるやうであつた。

「奥さんはあまり好きぢやないやうですね」と私は、口をつけても表情を變へない夫人にいつた。

草加が代つて答へた

「こんなものはやはり老人の飲むものぢやない、俺たちには濃いお茶の方がいいやうだよ」

「さうですね」と夫人はいつた。

すると草加も急に勢ひを得たとでもいふやうに、日本人にはお茶の方が體質に合ふとか、お茶がないと自分には仕事がつづけられないとか、お茶といふものがどんなに家庭で重要な役割を演じてゐるかわからないとか、際限もなく喋りつづける。初めは私も珍しいことだと思ひ、いささかあきれてきいてゐたが、つまりは黙つてゐる空氣に堪へられない故だとわかり、いつさう息苦しいものが感じられてくるのであつた。

それでも私はやがて機會をつかんでいつた。

「たまにはかうして、お揃ひでお茶を飲みに出られるのもいいぢやありませんか、躰のためにもなりますよ」



「さう思はんこともないのだがね」と草加は夫人をかへり見て笑つた。

夫人も笑ひながら、

「探傷器とやらいふのが出来あがつたらお願いします、それまではかへつて私の方が氣ぜはしくなりませんから」とチラリと私の方を見た。草加の眉毛が神経的に動いたのに私も思はず口添へた。

「それがいいですよ、一日も早く完成させていただきますせう」

「私もこの頃になつて、やうやくたつたひとつの希望だといふことがわかつてまゐりました」

獨り言のやうに呟いた夫人の聲は悲しげにひびいたが、瞬間に私は本心でない本心に接した感じで寒む寒むとしたものに襲はれてしまつた。然し私は黙つてゐた。草加を前にしてはつつしまなければならぬと思つたからである。

けれども間もなく出ようといふときになり、急に草加が小用に立つたので、私は意識

的に、

「ねえ、奥さん、私はうちあけてしまつた方がいいと思ひますが、どんなものでせうね」

「何をですか」と夫人は眉をひそめた。

私はいつた。

「さつきのことですよ、奥さんがまた静岡へ行かれるといふこと」

「ここですか」

「さうです」

「私から？」

「話しくけりや私が代つてあげてもいいですが、出来たら直接の方がいいぢやありませんか、そして解決すればお互ひが釋然として今後のためによいやうに私には思へてきたんですがね、如何でせう？」

夫人の瞳が私の顔に据ゑられた。それは私の本意がどのやうなところにあるかをたし



かめるといふのではなく、すでに見きはめてしまつたあとの反撥的な輝きに満ちてゐるやうに私には見られた。

夫人はいつた。

「私には話せさうもありません」

「ぢや、私に話せと仰言るんですね？」と私もあとへは退かなかつた。

すると夫人は肘をついてゐたテーブルから身を起し、俄に笑顔をつくりながら、

「そんなにいちめないで下さいな」といつた。

それには私もあわてて、

「いや、別に奥さんをいちめるとか何とか、大それた考へなどは持つてをりませんよ」

「さうでせうか」

「さうですよ、ただ私は、出来るだけのことをしたいと思つてゐるだけです、それ以外には何もありません」

「けれども……」と夫人は今度はまぶしげに私の顔を見た。

つづけていひたさうでもあつたが、途端に手洗所の扉がひらいてしまひ、振りかへる間もなく張りつめた顔色の失せて行くのがわかつた。そして出てきた草加に氣づかれた様子もないのがわかると、草加に代つて私にお待遠うさまといつてから立ちあがり、自らスタンドのところまで歩み寄り、帯の間から囊口を取出して、代金を支拂ふのであつた。

草加につづいて出ようとする、背のびをして耳もとで、

「いつかまたゆつくりご相談にのつていただきたいと思ひますが、本當に草加には仰言らないで下さいまし、私もあきらめましたから……お願いいたします」といふのであつた。

若し草加がゐなかつたなら、何をどのやうにあきらめたのかききかへすところだつたが、さうしなくもまたわかるやうな氣持でもあつた。いつしよにゐることが草加には不



幸だといひ、自分には苦しみだと訴へたことから想像される心情である。然しあきらめたといふことはいつたい何であらう。單なる彼女自身への敗北ではないであらう、やはりそれは彼女の浮動する過程にしかないものにちがひない。さう思ふと私には、あきらめたといつてあきらめきれないやうな様子で、草加と街に肩を並べ始めた夫人が會てなく痛痛しく思へてならなかつた。

風が激しく、話したすものもなく、私は二人のあとについて行つた。兩肩をすぼめて歩く夫人にくらべて、重い風呂敷包を下げてゐるせみでもあらう、持ちあがつてゐる一方の肩で斜めに風を切るやうにしながら行く草加の様子が私にはたけだけしい感じで迫つた。その風呂敷敷にはいつてゐるものを思ふと、自然に微笑ましくもなつてくる。

私は風の中で、何度も煙草のマッチをこすつてゐた。容易に火はつかかなかつたが暫くすると、

「ここにあるぞ」と草加がいつた。

見れば十間も先に立ちどまつた草加が、火のついた煙草を差しあげてゐた。それから火の粉が飛んでゐる。私はマッチをしまつて走りだした。

私たちのほかにはもう人通りは見られなかつた。

水圧試験器の修理は三日ほどで完成した。やはり餘暇を利用しての仕事だつたが、青寫眞のために途中で戸惑ふやうなこともなく済み、特に念をいれた甲斐もあつて、かへつて初めのものより出来栄がよいやうにさへ思はれた。それに従事させた技工は、ずっとそれまで実際に使用してきてゐるのだが、今更の如くに理のある組立に感心し、草加への尊敬の念を深めたやうであつた。それは機械の組立に少しでも知識のあるものなら、極めて簡單なだけに一面では何でもないと思ひ、すぐにまたほかの一面ではそれ故に驚きの感じられる、といつたやうなものなのである。



晝の休憩時間には、食事を済ませたひとびとも煙草をくゆらしながらあつまつてき、休憩時間にもやつてゐるといふ點に敬意を表し、それからは一刻も早い完成を待つてゐる氣持が窺へた。みんなのためでもあり、機關區全員のためでもあるのだから、休憩時間にはかりやらないで、朝からかかりきつたらよからう、とまでいふものも現れ、それでは六ヶ月検査が困るだらう、といつても承知しない。二人や三人の分なら自分たちが引受けるから大丈夫だ、といふのである。それに相槌をうつものこそあれ、一人として反對するものなどなかつた。部分品の足らないのがあつたなら、つくつてやつてもよいとばかり、腰をかかめてくるものさへあつたくらゐだ。さうした技工たちの本心が、どこにあるかすでに説明する必要もないと思ふが、とにかく試験器が壊れてからの水壓測定作業の困難さは、私などの想像以上だつたにちがひない。

間もなくものにならうといふ日の午後であつた。恰度その日は六ヶ月検査の作業も進捗し、いつもより二、三時間も早く終了したのはよかつたが、いよいよ水壓試験をやつ

てみようといふことになり、一人の技工が出来たかどうかとききにきた。彼にすれば、折角早く作業も済んだのだから、水壓試験に手押ポンプでたくさんの人手を使つたり、長い時間をかけたりするのが馬鹿馬鹿しかつたのであらう。いかげんに使はせたらどうだ、といふやうな切出しだつた。それには修繕中の技工もむつとし、殊更意地わるくぢきが出来あがるが、今日は使はせるわけにはいかん、といつた。すると相手もちよつと初めの自分の言葉を反省し、そんなに怒らんでもよからうと笑つたが、修繕中の技工はよけいかどかどしく、出来あがつたからとすぐに使はれたのでは困る、試験して完全だといふことになつたら渡してやる、といふのである。然し相手も負けてはゐない、どのやうな試験をするつもりか知らんが、それを實際に使つてみるくらゐたしかなことはあるまい、それで駄目なものなら駄目なのだから、初めからやりなほすほかに仕方がなからう、といつたが、それでもうんといはない修繕中の技工を見て、その頬のあたりへ平掌を飛ばしてしまつたのである。撲られた技工は、いちど三和土の上によろめき倒れ



たが、やうやく立ちなほると相手に組みついて行つた。

知らせで私が駆けつけたときには、顔や首筋などに擦り傷を負ふた二人を中にして、数人の六検組と試験器の修繕組とが對峙し、おたがひに口ぎたなく罵り合つてゐた。そんなわけならもう使つてやらんといふのが六検組のいひ分であり、三拜九拜して使つて貰ふために、自分たちは休憩時間までだいなしにしてやつてゐるのではないといふのが試験器修繕組の應酬であつた。初めは私はその両方の權幕の荒いのに、うまい調停の言葉を口にすることも出来なかつた。ばかりでなく、いま私が便宜上使つた「六検組」にしる「試験器修繕組」にしる、三日前までは同じ「六検組」だつたのを思ふと、仕事のちがひからくる感情的なものが、空恐ろしいやうにも思へてくるのであつた。然しやがて私は、その試験器の修理が終りさへすれば、すぐに解決する問題であるのに氣づき、頭からおつかぶせるやうな調子で、こんなところを技工長にでも見つかつたら、飛んでもないことになるぞ、といつた。やうやく青寫眞をだして貰つたのを思ふと、それが決して

單に仲直りをさせるための空言でないのが、私自身にもわかつてくるやうな氣がした。といふよりは、そんな面倒ならやめてしまつたらいいだらう、といふ草加の言葉がすでに聞えるやうであつた。

そのとき、明るい午後の陽の光もとどかない、車庫内の修繕線の暗がりを指しながら一人の技工が小聲でいつた。

「あそこにゐますよ」

視線がいつせいに向けられた。出来あがつてゐる六ヶ月検査機關車の向ふを、幾らか俯向きかげんに首をまげ、腕を組んで歩んでゐるのは、たしかに草加であつた。溝と溝の間のせまい三和土の通路を往つたり來たりしてゐる。ゆつくり方向轉換をする際の顔から、深い物思ひの中にゐるのがわかり、やはりまだうまくいかない事實を想像することもある。その二、三日來、何も手をつけない草加が、さうして考へ込んでばかりゐるところを、何回も私は見てゐる。或時は事務室で、或時は車庫裏で、或時は工場内で、



そのときどきの用事まで忘れてゐることも珍しくなかつた。仕事が仕事だから、幾ら焦つても駄目だと思ひながらも、急に變つた彼自身の事情を考へると、つひに私もさうもいへなくなるのである。

「いつごろからあそこにあるのかしら？」と私はたづねた。

その技工も心配さうに、

「いま氣がついたんです……少し大きな聲なら聞えるでせう」と答へた。

「とにかく問題はあづけて貰はう、六検組はすぐ手押ポンプで仕事にかかる、それから修理組は今日中にしあげる……それでいいだらう」

さういふ私には返事もしないで、やがて六検組は引きあげて行つた。その何れもの視線が、なほ草加の方へ向けられてゐる事實から考へるまでもなく、そのやうな彼等の従順さが、何から出てゐるか私にもよくわかるのであつた。それは明らかに、技工長としての草加が恐ろしいのではなく、仲間争ひそのものを反省しだしたからでもない。ただ

黙々と車庫内を往つたり來たりしてゐる草加の姿に、つよく感ずるものがあつたからにちがひない。それにもかかはらず私は、技工長の名を持ちだすことで、頭から抑へつけようとしたことを思ひかへすと、ゐたたまらぬ恥づかしさに襲はれてしまふのであつた。私は修理組の一人に、

「仕事中に技工長は見にきたかね？」とたづねてみた。

仕事にかかつてゐた相手は、モンキーの口巾をひろげながら首を振つた。

「脇を通つても見てくれませんよ」

「一度も？」

「ええ……ですから初めのうちは、やはり怒つてゐるんだな、と思つてゐました、さうでもないらしいのもわかつてきましたかね……」

「どういふ風に？」

「いそがしいんでせう、いそがしいときには誰だつて不機嫌になりますよ、私たちもさ



う思つてやつてるんです……」

それをそのまま肯定した私は、出来るだけ早くしあげるやうにいひ置いて事務室へ歸つたが、さうした技工たちの草加にたいする態度といふものが、僅かの間にすっかり變つてしまつたことに氣づかないではゐられなかつた。草加の考案への熱情なり行動なりが、彼自身のためとのみ考へられたり、いひ傳へられたりしたところにくらべたなら、全く驚くべきほどの變りかたである。それは私などにも豫想出来ないこともなかつたが、そんなに早く來ようとは思ひもしなかつただけに、私の喜びも大きかつた。

どうやら試験器がものになつたといふ報告があつてから、間もなく事務室に歸つてきた草加の骨張つた顔に、一瞬私はびつくりしたが、すでに何回も繰返してゐる事實に氣づきながらもいはないではゐられなかつた。

「おかげで試験器も出來あがりましたが、技工たちの喜びやうつたらありませんよ、仕事に携つてきたものより、ほかのものの方が喜んでゐるんですからね、随分變つたもん

です……いちど、見ていただけませんか？」

ちらと視線を寄越した草加は、すぐに自分の椅子に腰を下し首肯してゐたが、暫くして皮肉な口振で言つた。

「明日になるとまた壞れてゐるんぢやないかね」

「そんなことはありません、ある筈がないぢやありませんか」と私は不意に水でも浴びせられたやうな思ひでいつた。

然し彼は窓の硝子越しに土手の向ふの本線の方へ視線を据ゑながら、いつそ冷やかな調子で、

「なければ結構だが、さうも思ひきれないものもある、一人や二人ではないのだから、よほどしつかり考へてゐないといけないね」

「何かこれは、といふやうなものでもゐるんですか？」

思はずき返した私に、彼の言葉も若干震へを帯びてゐた。



「別にさういふわけでもない……が、そのやうに見てゐることも大切ぢやないか」

「どうしてでせう？ 私にはそんな必要は少しもないやうに思はれるのですが……」

「さうだらうか」

やうやくストーブの方へ向きなほつた彼は、作業衣のポケットから皺くちやの煙草を取出し、わなわなする指先でマッチを擦つた。一、二服吸つたかと思ふと、すぐに舌に残つた屑をべつべつと吐きだしたが、今度はストーブの扉の穴から首をだす炎に見入つたきり、執拗に黙つてゐる。その様子からは、現實に話題になつてゐることを考へてゐるのではなくて、新しい仕事への思索がつづけられてゐるやうにも見られた。あの修繕線の暗がりや、腕を組んで黙々と歩いてゐたときの感じに、そのまま通ずるものもあつた。然し私は、未だに彼が水圧試験器の破損が、ジャッキの自然落下によるのを信じないばかりか、明日になるとまた壞れてゐるのではないかといふやうな言葉で示した不安の中にゐる事實には、眼をつむつてをれない氣持であつた。といふのは、さうした猜疑

の眼ばかり向けられてゐる彼の部下なり同僚なりが氣の毒に思へたし、若し彼がそのやうな煩はしさから釋然と出來たなら、軌道探傷器の考案にもどんなに役立つかわからないやうにも思へたからであつた。

私は稍よくど過ぎるのに氣づいてゐたが笑ひながらいつた。

「とにかく成行を見て貰ひませう、そしたらみんなの氣持もわかつていただけると思ひます、若し今後同じことが起きたら、そのときは私が兜をぬぎますよ」

すると草加も濃い紫煙を吐いて笑ひ、

「なるほど、そりや面白い、然し君何だよ、君にはぬぐ兜があるからよいが僕にはない、かけにならんね」と今度は聲をたてて笑つた。

それがどのやうなことを意味してゐるのかわからなかつたが、不意に響く車庫内からの高い汽笛に間を置いた私は、ふと彼の本質をつきとめたいやうな欲望にそそられ、あらためてから質問してみた。



「いつかの草加さんの話では、軌道探傷器を考案しようとした動機は、十郎さんの戦死にあるといふことでしたね、それは非常に美しい動機でもあり、私なども感動してゐるわけですが、さうした動機の美しさといふのを、本當に守らなければならぬ氣持と、水壓試験器にたいする草加さんの態度とから、何かちがふものが感じられるんです、それがどういふわけか私にはわからないんですけど……」

戦死のことから伏せられた顔が、急にあがつて悲痛な面持に變り、ちよつと口もとが動いたかと思ふと、驚くほどの大聲が發しられてゐた。

「俺にもわからん！ わからなくともいいぢやないか！ ただ俺は試験器の場合も、今度の場合もやらなければならぬと思つてやつてゐる、それだけではいけないといふんだね」

それには私もあわてて、

「さういふわけぢやありません」と否定した。

然し彼の語調は變らなかつた。

「といつてもさう聞えるぢやないか、態度がどうのかうのと……」

「言葉がわるかつたらあやまります、何も私は草加さんの態度を責めるとか何とかいふ氣持から伺つたわけぢやないのですから」

「ぢやどういふつもりだつたんだい？」

鋭くそそがれた視線を、曾てなく冷たく受止めた私には、そのやうなところに彼の性格が明らかに現れてゐるなどと觀察する餘裕はなかつた。

「何度いつても同じことですが、やはり私は草加さんに、水壓試験器を修理した技工たちの氣持をわかつて貰ひたいと思ひます、それだけなんですよ」

彼は吐きだすやうに、

「わかつてゐるよ」といひ、再びテーブルの方へ向きなほつてしまつた。

私にはつづける言葉もなくなつてゐた。それは感情的な相手の態度からでもあつた



が、それよりもそのわかつて貰ひたいとか、わかつてゐるとかいふことなども、殊更問題になどする必要もないやうに思へたからであつた。同時に私は、いそがしいときには誰でも不機嫌になるものだといひ、彼の職場生活を見まもつてゐる技工たちのことから、やはり自分自身を反省しないではゐられなくなつた。

## 第 六 章

その後の草加の行動は、全く得體が知れないといつてよく、ときに氣でもちがつたのではないかと思はれるほどの變態振であつた。相變らずの作業衣姿を、夜明けぬうちから事務室に運び入れ、誰に話しかけられても返事などすることなく、ただ凝と窓外に瞳を据ゑたまま何時間でも動かない。報告書の作製や、新しい仕事の計畫などに際し、恐る恐る意見を窺ふ私にも、きまつて一瞥をあたへるだけで、満足に答へてくれたこともない。その瞬間の瞳が、まるで熱病患者のやうな震へを帯び、あやしげにきらめくさまは、鋭いなどといふ言葉では表現出来ない。そのやうな状態の彼方にある無氣味さが感じられ、同時に私はひとつの不安に襲はれるのが常であつた。それは健康を害するだらう



とか、壽命をちぢめるにちがひないとか、さういつた程度にとどまらない、もつと豫測しがたい事實の現れることが感知されるのである。そしてその感は、きまつて午後になると出て行く彼が、特に人の眼のとどかない車庫内の暗がりを選び、そこでもときを忘れて思索に耽つてゐるところを見せられていつさう深まる。或一定の距離を、ゆるやかな大股で往つたり來たりする習慣もなくなり、ものの上に淺く腰を下し、兩腕で頭をかかへこんでゐることが多く、ちよつと近寄りがたいものさへ感じさせた。かと思ふと不意に奇聲をあげ、自分の拳でつづけさまに額をたたき、最後に畜生畜生と叫んでゐることもあつた。何處へ行つたかわからなくなつてしまふ場合もあつた。

然しさうした状態も長くはつづかなかつた。次第に失くなる顔色に代つて、明らかな焦慮の影が見え始めた。同じところに落ちつき、ひとつの問題を考へることの出來さうにないのが、簡単な書類にたいする態度からでもわかつた。それまではどんなにいそがしくも、ちよつと眼を通しただけで適當な判断を下し、私なりほかのものなりに指示す

ることが出來たのに、やがてそれすらも出來なくなつた。といふよりも、そのやうな書類や圖面などに見入つてゐられないやうであつた。急の仕事の必要から、構内を歩いてゐる彼をさがしだし、事態を話して裁決をもとめても、容易に意見を述べない。幾らか激しい言葉で迫ると、初めて自分にかへつたといふやうな表情になり、どのやうな話なのかと、ききかへしてくる始末である。然し幸ひなことには、ときとして自己を取戻した瞬間の彼の意見は、いつも私などの考へつかないほど深く適切であつた。ちやんと水壓試験器なり、ユニオンレンチなりの考案者らしいところを見せて、私を安心させてくれるのだが、若しそのやうなことが一度もなかつたなら、私は彼を本氣に疑ひだしてゐたかも知れない。

さうした彼の焦慮が、間もなく英靈がつくといふことに原因してゐるのは、私にもわかり過ぎてゐるくらいであつた。それとこれとは別だといつても、考案の動機が動機でもあり、自然にそのやうな状態に置かれるのは當然であらう。完成させた探傷器を、祭壇



に自ら捧げるさまは、恐らく彼が何回となく夢見てきた状景にちがひない。さうあるのを口では否定し、実際にはつとめてゐる彼の心情が、仕事の困難さを知るにつけても、どんなに苦しいか思ひやることも出来よう。然し私にはすでに慰めの言葉もなかつた。英霊は英霊、探傷器は探傷器だと繰返したところで、仕方がないといふ氣持であつた。

ただ時折私は、多くの技工にならつて彼の機嫌のよささうなときをねらひ、

「まだつきさうありませんか？」とたづねる程度にとどめてゐた。

それには彼もきまつて靜かに首を振るだけであつたが、高橋中尉から何かいつて來ないかといふ或日の私の質問には、變に唇をとがらせて答へた。

「戦地から持つて來るんだから、豫定が豫定になりやしない、そのときの狀況で、どのやうにでも變つてしまふもの……」

「さうですね」と私はいつた。

すると彼も首肯いてから、

「幾ら遅くともいいよ」

「……………」

「かうして靜かに待つてゐよう、そしたら十郎も喜んでくれるだらうと思ふ」

眩くやうな言葉の裏に、何かしいんとしたものも感じられたが、同時に私にはそれが仕事への並並ならぬ彼の決意の現れとして迫つてきた。そこには少しの不安も残らない、それでゐてただけしい雰圍氣もある、不思議な一瞬であつた。

こまごました電氣用品の風呂敷包を持込んだ彼が、暇を見ては修繕線の奥へもぐり、再度の仕事にかかつたのはそれから間もない。やうやくさぐりあてたものもたしかだといはんばかりの自信に満ち、顔色も俄に冴え、今にも倒れさうに見えてゐた肉體まで、まるで水を得た魚の如き蘇生振であつた。朝の挨拶のしかたから、ちよつとした雑談にも、全く別人の感があつた。ずつと手をだす氣にもなれなかつたらしい修繕の仕事にも、次第に積極的になつてきた。事務の處理についても同じだつた。それはちやうど、



ゆるんでゐたひとつの捻子を締めたために、各部分がいつせいに活動し始めた機械のやうな感じであつた。

けれどもまた別に、なかなか現金者だといふ感じもあつて、何かの用事で彼を現場へ迎ひに行つたとき、何気なくかういつてやつたことがある。

「今度は成功するでせう、すつかり条件もそろつたやうですし、私も大いに期待してゐますよ」

すると彼も微笑を浮べ、

「どういふ意味なの？ その条件がそろつたといふのは？」

「完成させるための条件ですよ、何もかもが草加さんを取巻いてせきたててゐるやうぢやありませんか」

「なるほどね、ここで頑張らないと男がすたるかも知れんね」

「そんなこともないでせうが、いよいよときがきたといふ感じですよ、このときを遁さな

いやうにしていただきたいと思ひますよ」

「大丈夫……といつても、信用して貰へさうもないが、死にもものぐるひでひとつやつてみよう」

それは私にといふよりは、彼自身に向けてゐるやうな様子で、言外に感じられる自信のつよさは、曾てなかつたほどのものである。ただ黙黙とも思ひの中にゐた数日間の彼などは、すでに何處にも見ることが出来なかつた。

同じ日の夕方であつた。少しく早目に六ヶ月検査を済ませた彼が、その邊でいつしよに飯でも喰はうと誘ひにきたときも、たいへんなご機嫌で私を氣易く承諾させた。きつと仕事が順調に行つたにちがひない、と私は思つた。同時に私はふと、大山みつ子の手紙を見せられた夜のことを思ひだし、何かまた面倒な問題でも起きたんではないかと疑つてもみたが、別にそれらしい様子もなかつた。

珍しくあたたかい日で街の人通りも多く、何處ともいはず光を行く彼の顔は、やはり



子供のやうに浮浮として見られた。作業衣をぬいで久し振の制服姿からも、如何にもその日を楽しむやうなゆとりが感じられるのであつた。

「君は本省の丸山さんといふひと知つてる？ 知らないだらうね」と停車場通りへ出ると間もなく彼はいつた。

知らないでそのやうに答へると、彼はもつともさうに首肯しながら私を見た。

「さつき區長室で會つたんだが、何でも機關車の方を擔任してゐる技師とかでね、現在の探傷器の權威者なんださうだよ」

私もいつか讀んだ軌道探傷器についてのパンフレットの著者が、そのやうな名であつたのを思ひだし、そのひとと草加が會つたといふのだから、何か面白い話があつたにちがひないと思つた。

「草加さんの探傷器のことで、わざわざ本省からやつてきたわけぢやないでせうね」

「そりやさうだよ」と草加は微笑を浮べていつた。

「ほかの用事できたんだが、區長の話で會ひたいといふことになつたらしい」

「何とかいつてましたか？」

そのやうな私の性急さにもかかはらず、すぐに彼もまるで自分に關係ないことでも喋るやうな氣軽さで答へた。

「機關車技術には明るいひとで、テーブルの仕事からばかり得た知識だとも思へなかつたが、探傷器となるとやはり固定したものしか持つてゐない、それにはちよつと驚いたよ」

「なるほどね」

「そのひとはいふんだ、磁氣や電氣などによる軌道の検査には限度がある、機械の装置や組立をどのやうに變へても、さうした原理だけは何ともしがたい、要するに無駄だからやめたらよからうといふ忠告なんだが、わかるだらう」

「よくわかりませんね」



「つまり何だよ、現在の装置では何百米もの軌道を磁化させることは不可能だから、従つて探傷器も通過地点にしか性能を發揮することが出来ないといふわけさ」

「それぢや別に新しい意見でも何でもないぢやありませんか」

「さうなんだ、俺もよほどさういつてやらうと思つたが、相手はえらいひとだからと考へなほして戻つてきたわけさ」

集會の歸りでもあるらしい、婦人會のひとつとが騒騒しく角から現れたので、そのまま草加も黙り込んだが、瞬間に私の瞳に映じた横顔は、やはり自信に満ち満ちたもので彩られてゐた。今に見てるがよいといふ、反撥的な感情の色さへ添へて頼もしくもあり、妙な悲壯感をさへあたへるのであつた。然し私にはまた單なる興味とはなし得ない、新たな不安の念も首をもたげてきた。それは彼が、數百米の軌道を磁化させるのにどのやうな装置を計畫し、どのやうに製作しつつかあるかといふことと、果してその見通しがついてゐるかどうかといふこととからであつた。その點結局は私にも、彼に忠告し

た技師に變らぬ存在にはなるが、たとへば同じやうに一笑に附されるにしろ、はつきりきいて置かなければ承知出来ない氣持であつた。

「たいへんなことぢやありませんか、數百米の軌道を磁化させるなんて……可能だとすると草加さんの探傷器ばかりでなく、いろいろなものの改良にどんなに役立つかわかりませんね」と私は相手の顔を覗きながらいつた。

然し草加は冷靜に答へた。

「出来るのはまちがひないが、問題はどの程度まで可能にやれるかといふことだね、簡単な装置でなかつたら駄目だから……その點だよ」

「で、草加さんの計畫といふのはどんなんですか」

思ひきつて切り込んだつもりながら、案外に彼も巧みに體をかはしてゐた。

「初めは磁化させないでやる方法はないものかと考へたのさ、それも不可能ではなからうが、僕等の頭脳では問題にならない、それこそ忠告に價するもので、だいたい時間もつ



ぶしちまつてね、いま考へると残念でならないよ」

「さうもいひ切れんでせう、ためになつてゐるにちがひないですよ」

「まあ、ねえ」

「それで何ですか、つまりは磁化の問題ですが、それはまだ教へていただくわけにいかないでせうね」

「さういふわけでもないが……」と彼は語尾を濁らせた。

「やはり駄目だと仰言るんでせう」と私は突つ込んだ。

暫く間を置いてから彼はいつた。

「話してしまふと實際の仕事に張りがなくなるやうな氣もするんだよ、さうなつたらおしまひだからね、出来あがつてからにして貰はう」

「それでも軌道の磁化による方法を採用しようといふのは確實なんでせう」

「それ以外には考へられないぢやないか」

「むつかしいですね」

さういつて私は口を噤んだ。草加の表情もちよつと變つたが、別に機嫌をわるくした様子もないのにホツとした。そして暫くは黙つて歩きながら、あらためて私は草加が數百米もの軌道を磁化させるために、どのやうな機械を空想してゐるものかと、それが成功を疑ふ意味からではなく考へてみた。然し私のやうなもの頭脳には一向に浮んで來なければ、もつともらしい端緒を得ることも出来なかつた。ただ際限なく磁化コイルや、鐵心や、探傷コイルなどの部分品が、うづまき動いてゐるだけであつた。

それから間もなく私たちは、街の或牛肉屋の二階に向ひ合つて坐つたが、最後まで同じ話題を繰返さなかつた。然し草加はいちども箸を置かず喰ひ、高い聲で話しては笑ひつづけ、すつかり私を壓倒してしまつた。それが如何にもいつもの草加らしくなく、ときには若干不愉快な思ひにもさせられたが、さうした態度も仕事への自信のつよさの現れだといふ風に思へてくる。まるで啞者のやうに黙り込み、ひとつのことしか考へて



みなかつた何日か前までの彼を想起すると、私にはまた彼の胸の中の成算が信頼されてくるのであつた。

同時に私の考慮は自然に、それにしてもまだ金が十分ではないだらうといふ點から、例の大山みつ子の問題や、山邊以下の債権者のことや、夫人の心情にまで及んだが、すんで口にすることも出来なかつた。さうすることで彼の瞬間の幸福を、無慈悲に奪ふ結果に陥りさうにも考へられたからであつた。

再び夜晝ない生活が始まつた。それは何日もつづいたが、不思議に今度は疲勞の色も見せず、かへつて日増しに張りのつよまりゆくのがわかる。定刻前に出勤し、きまつて一時間以上も居残る私ではあつたが、到底彼にはかなひさうになかつた。私が出勤する頃には、はや彼は修繕線の奥にうづくまつてをり、三和土の上にひろげた鉛筆書の略圖

に見入りながら、小さな部分品の組立に餘念ないといふ有様だつたし、晝間の業務を済ませたあとも、休むことなく同じところで日の暮れるのも知らない。終業汽笛が鳴つて數時間もし、寒さと空腹とに堪へかねた私が、歸宅をすすめるために近寄つて行くと、いつも先に歸つてくれといはれてしまふ。にもかかはらず私にはすでに、さうした彼自身の健康のためにもよい加減にしたらよからう、などといふことが出来なくなつてゐた。それはひとつには今度こそ本當に完成するやうに思へたからでもあつたし、やがて十郎の英靈が歸還するといふ事實が、私の身にさへのつびきならぬ問題としてのしかかつてきたからでもあつた。その英靈の歸還については、減多に彼も口にしなかつたが、それだけに深い關心があるやうにも思はれ、若しそれまでに完成出来なかつたとしたら、果してどのやうなことになるかはかり知れたものではないといふ風にも思はれた。いや殊によると死を選ぶかも知れないといふ不安さへあつた。私は彼が高橋中尉からの手紙を見せてくれたときのことを思ひだす。月末につくだらうといふ豫想に困るといひ



困ることはないと思つて、俺の氣持だけの問題だから、さういはれてしまへばそれまでだが、倅に濟まない、どのやうな顔をして遺骨を迎へたらよいかわからない、と自嘲したときの彼の顔である。瞬間には私も頭から否定してしまつたが、さう簡単に解決つく筈のものでもなし、それが或は新しい決意へのポイントになつてゐるかも知れないのである。それやこれやを考へ合せると、やはり私には英靈が一日も遅くつくことを祈らないではゐられなくなる。といふよりも、探傷器が完成してからついてくれたら、どんなによいかとねがふ氣持の方がつよくなるのであつた。

然しそのやうな私のねがひでも單なるねがひに終るときが間もなくきた。英靈の内地が陸が確實となつたのである。それを私は職場を訪れた夫人から、草加に知らせたものかどうかといふ相談のかたちで知らされた。その瞬間にも私は、何れかといへば修繕線の片隅にうづくまつてゐる、草加の姿を痛痛しく思ひ浮べてゐた。

何かいひたげに唇を震はす夫人の顔が、まるで娘のやうに紅潮するのを見て、ふと私

は同情して迷つてゐるよりも、禮をつくして迎へる準備をすすめるためには、無慈悲な裁斷も必要だと考へ、それで原隊につくのはいつかと夫人にたづねてみた。すると夫人もやうやく氣づいたらしく、小さくたんで片掌にしてゐた電報をひろげ、高橋中尉さんからだといひながら差出した。その電文では二日後に原隊につき、ただちに慰靈祭が施行されるといふことが明らかにされてあつた。

私は自分でも若干事務的に過ぎるのを意識しながら、

「これでは時間もはつきりしてませんから、私の方から一應原隊の方へ問ひ合せてみませう、それからまたこれまでの例からいつても、多分市葬になる筈ですから、その方面へも連絡をとります、ただ奥さんは、草加さんとごいつしよに原隊へ行く支度だけして置いていただければいいですよ」といつた。

うつむいたまま首肯しながらきいてゐた夫人は、やがてそこからも見える車庫内へ視線を送り、いそいでまた顔を伏せてから獨り言のやうに呟いた。



「やつぱり草加に話さないわけにはまわりませんでせうね」

「どうしてですか？」と思はずき返した私は、すぐにおだやかな調子を取戻した。

「何なら私からお傳へませうか」

すると夫人も顔をあげた。

「そんなご迷惑までかけられません……けれども草加が知つたら、どんなことになるかと思ふと、ちよつと話せさうもなくなつてしまひますの……ほかによい方法はございませんでせうか」

「といひますと？」

「當分は草加に知らさないで済む方法です」

私はつまつた。そのやうなことが、出来る筈のものでもないのが明らかだけに、よけい私には返す言葉がなくなると同時に、夫人の考慮を軽く否定し去ることも出来なくなるのであつた。正直なところ私も夫人と同じやうなことを考へないでもなかつた。探

傷器が完成するまでは、何か適當な方法で草加には事實を伏せて置き、いつそ積極的に協力してやらうといふ氣持であつた。然しそれも考へてみれば、萬里を越えて歸還する英靈の意に添はぬ感もあり、探傷器の完成といつたところで、それが實際にはいつのことかはかり知れたものでもないのだから、やはり自然の道を選ぶよりほかに仕方がないやうに思へてくる。

「ねえ、奥さん、私は今日にでもお傳へした方がいいと思ふんですけどね……」と私はいつた。

そのときはもう夫人にはたぢろぐ色も見られなかつた。

「本當にかくしきれないことでございますから」

「さうませう、草加さんだつて何ですよ、一時は殘念がるかも知れませんが、そのままになつてしまふやうなことは絶対にないでせうからね」

それだけで私にはすでに、靜かに祭壇の前にぬかづいて、新しい決意をかためる草加



の風貌を想像することが出来た。それはいままでに見られなかつたほどの憤りに満ち、今日の日本の目的に一致するところの精神と、激しい落ちつきとの感じられるものにはちがひなかつた。英靈のつくまでに完成させなければならぬといふやうな、十分にかる氣持の中にも感じられてゐた不安も、全く姿をかくしてゐる。さうなるとかへつて完成の日の早められることも、實感として私には信じられ、夫人にもいはないではゐられなくなり、それ以外の方法はないと斷言した。すると夫人も次第にその氣になつてきたらしく、やがて悲しげにしやくりあげながら、さうしていただきます、と呟いた。それからはもうとめどもない涙に、何度もハンカチを使つては、その度に飛んでもないことをご覧にいれて申譯ありませんといひ、痛痛しい笑顔をさへ見せるのである。草加の心情を思ふ氣持でおさへてきたものが、俄に逆りだしたのだと思ふと、さすがに私にも慰めの言葉がなかつた。

といつて、いつまでそのやうにしてゐても際限ないので、私は思ひきつていつた。

「今日は試運転もありませんから、どこかにいらつしやる筈です、すぐにでも呼んでまゐりませうか？」

「さあ——」

夫人は私を見まもつたまま考へ込んでから、いま話すよりひけてからの方がよいやうに思ふ、といふので私も賛成した。そのやうな夫人の考慮がどこにあるのかわからなかつたが、私は私で英靈を迎へることに支障を來さない範圍で、出来るだけ多くの時間をあたへてやりたいと思つたのである。

夫人が歸つてからの私には、草加には内證の原隊と市役所との連絡のために、顔を合せる機会もなかつたが、翌朝定刻になつても彼は姿を見せなかつた。近くから通つてゐる技工に、何か言傳はなかつたかときいてもみたが、全然なかつたといふことであつた。探傷器の仕事場を覗いても、いつものやうに綺麗に片づけられてあり、部分品ひとつ残つてゐなかつた。自然に私の網膜には、英靈歸還の事實の前に、複雑な自己の心情



を處理することも出来ず、懊惱してゐる草加の姿が映しだされた。恐らくは就寝前にきかされたであらうから、一睡もなし得ないで研究室に夜を明かしたにちがひない、その一夜がどんなに長いものであつたか、苦しいものであつたか、思ひやることも出来た。そして今頃は疲労のために混濁した頭をかかへ、自失せんばかりの状態でいたづらな思索に耽つてゐるであらうと、何ともしがたい切實な共感にまで私も導かれてゐた。

けれども間もなく私は、それが私の單なる杞憂に過ぎないのを、再び訪ねてくれた夫人から知らされた。夫人は葬儀が終るまで休暇が欲しいといつてきたのだが、その態度には前日にも増す痛痛しさが感じられたにもかかはらず、草加さんも驚いたでせう、といふ私の質問には、意外にもそれほどでなかつたといひ、幾らかとげとげしい口振で物語つた。

「たつたひと言、ああさうかといつて自分の部屋へはいつてしまひましたの……何の相談も出来ない始末なんです、いろいろと話を持ちかけましても、ただ準備はお前にま

かせるからといふだけで、またこつこつ始めるんでございます、私もあきれてしまひましたが、氣持もわかるのですから黙つてをりました、それでも今朝になりますと、急に休むからといひだしたものですから、願ひにあがつたやうなわけでございます」

「そりや結構です」と私も妙に考へ込まれるよりどんなによいかわからないと思ひながらいつた。

夫人は靜かに顔を振り、變にいひにくさうに、

「それで飛んでもないことをあなたにまた願ひしてこい、といふもんですから……」と口ごもり、さまざまな電氣用品の名稱を書き並べてある紙片を示し、これが欲しいんださうです、と説明した。

「何とかしようぢやありませんか」

つとめて氣輕に呟いた私も、ひとつひとつ紙片の文字に見入りながら、それをどうして手に入るべきかに迷はされた。僅かならともかく、そろへて持つてゐる店があらうと



は考へられなかつたし、若しあつたとしても、それぞれが相當な高價品でもあるので、そのための金を得ることも急には出来さうにもなかつた。夫人も遠慮深い微笑にまぎらせていつた。

「私は一日や二日のところで、ご無理を願はない方がかへつていいんぢやないかと思ひますけど……」

「さうですね」

「自分では原隊へも私だけやらうといふつもりなんです……さういふつもりでなくとも、この機械が手にはいりますと、さういふことになつてしまふかも知れませんもの……」

まさか、といふ風に考へられなくてもなかつたが、同時に私には草加自身がどんなに思ひつめてゐるかわかるやうな氣もし、夫人に賛成しないではゐられなくなつた。それにさうした夫人の様子には、草加と二人で街を歩いた夜のどことないよそよそしさが感

じられないばかりではなく、家の大事を前にしての主婦らしい心の張りもわかつてきた。そこで私も安心させるつもりで、原隊の慰靈祭には何でも私かでも私が引つ張つて行くからといひ、おつかぶせるやうに、

「草加さんにすれば何ですね、奥さん、行つても行かなくとも同じことになりませう、お父さんとしての草加さんが、少しでも早く探傷器を完成させれば、それだけ英靈も喜ばれるにちがひありませんからね」と附加へた。

夫人も微笑んだ。

「本當にさうなんですけど……それでもやはり迎へにだけは出て貰はなければ氣が済みません、十郎や私が承知しても、原隊のお方に申譯ないと思ひます」

「いや奥さん」と私は手を振つた。

「私は草加さんの氣持についてだけいつてゐるんです、そりやもう、どんなことがあつても出て貰ひませう」